

宮澤賢治「疾中」詩篇の研究

文学科 黒澤 勉

目次

- 一、賢治の病歴
 - (一) 肋膜炎の診断まで
 - (二) 農民活動の挫折
 - (三) 「疾中」時代の病い
- 二、「疾中」詩篇の概略
- 三、風
- 四、死の不安・恐怖
- 五、菩薩
- 六、南無妙法蓮華經

一、賢治の病歴

本稿は宮澤賢治の「疾中」詩篇について考察しようとするものであるが、これらの詩篇は、その題からもわかるように、賢治の病氣という問題が深く影響しており、その病氣なしには決して生れなかったものである。そこで具体的に作品の検討に入る前に、賢治の病歴について確認しておきたい。

(一) 肋膜炎の診断まで

賢治は一九〇二(明治三十五)年九月下旬(五才)赤痢を病み、花巻町本城の隔離病舎に入院している。二週間程で退院したが、この時、父政次郎(二十八才)も看病中に感染した。

続いて、一九一四(大正三)年四月(十八才で盛岡中学校を卒業した直後)以前から悪かった鼻(蓄膿症)の手術のため、盛岡の岩手病院に入院して手術を受けた。ところが、手術後、発熱し、発疹チフスの疑いがあるというので、隔離病舎に移された。賢治の最後の主治医であった佐藤隆房の「宮沢賢治」によれば、発疹チフスというのは誤診で、実は結核の初感染ではなかったかと推察している。結核は「くすぶる病氣」といわれ、初感染は治ったかに見えるが、菌が侵入しているので、栄養・休息などの不足によっていつでも再び発症する危険性を秘めている。ストレプトマイシンのような、威力のある薬が発明されていなかった戦前においては、結核は自然経過をみるだけで積極的に治すことはできず、病名についても、最終的な診断がついた時点で、最初の病気が何であったか判明することも多かったという。してみれば、賢治の命を奪った結核の感染はこの時であったということも充分考えられ

ることである。

十八才で岩手病院に入院したこの時も、赤痢を病んだ時と同じように看病していた父が感染発熱し、一ヶ月も病床に臥す身となった。五月中頃に退院するが、この入院は病気の苦しみだけでなく、看護婦に対する初恋、進路の悩みなども重なって数多くの短歌を生み出した。又、その短歌を母胎として、賢治の死の年に定稿として完成した文語詩の重要な素材ともなっている。その文語詩の下原稿に「わが父はわが病ごと二たびのいたつき（Ⅱ病氣）を得ぬ、火のごとくきみをおもへど わが父にそむきかねたり」とある。自分を看病してくれた父が二度までも感染したこと、その愛情を思えば、自らの恋を断念せざるをえないというのである。

小学校入学前と、盛岡中学校卒業直後と二度の入院があるとはいえ、賢治は決して病弱だったとは言えない。小学校時代は精勤で通しているし、盛岡中学時代も目立った欠席はない。中学時代の同級生阿部孝によれば、人並外れて運動が苦手で、体育の教師の嘲笑を買っていたとはいえ、登山の時などさっそうと先頭をきって歩いたという。単独であるいは友人達としばしば岩手山をはじめ県内の山野を跋涉した賢治は、健脚で、心臓、肺など内臓諸器官もおそらく人並以上に恵まれていたと思われる。しかし、体力があることと伝染病に感染すること、又免疫力のあることとは別の問題であろう。おそらく十八才で結核菌に感染した賢治の肉体には、熱がおさまってもひそかに肺結核が進行していたのかもしれない。

賢治が、自分が病に侵されている身体だとの意識をもち始めたのは一九一八（大正七）年、二十二才の時のことだった。この年四月二十六日、徴兵検査で第二乙種、兵役免除となるのである。これは一人前の健康な男子とみなされなかったということである。

賢治の身体のどこに問題があったのだろうか。このことを暗示するのが、徴兵検査から二ヶ月余り経った六月末、

岩手病院に行つて診察を受けているという事実である。七月一日付の父宛書簡には、この時の診断について次のような記述がある。

「拝啓 先日は御手紙難有拝見仕り候 皆様御変り無之事と存じ上げ候 私も別段の事は御座無く候へども近来少しく胃の近く痛む様にて或は肋膜炎かと神経を起し昨日岩手病院に参り候処左の方少しく悪き様にて今別段に水の溜れる（＝肋膜炎に水がたまる）とか云ふ事はなきも山を歩くことなどは止めよとの事にて水薬と散薬とを貰ひ参り候 本日学校を二三日休みて今少しはつきりとなりて出校致したき旨先生（＝賢治の主任教授関豊太郎）へ申し候処 それならば鈴木医学士に見て貰へとの事にて先刻同医師宅に参り候

診察の末只今は決して悪しと云ふことなきも殊によれば罹るやも知れず薬は矢張用ふる様且つ山へ行く（＝土性調査のための実地踏査。この年、高等農林を卒業した賢治は、研究生として入学、四月から九月まで稗貫郡土性調査に携わつた。）前には必らず見て貰ふ様然らざるも毎週一回位は来る様にとの事にて尚只今の分析は差支なしとの事に御座候

何分この様の事に一一神経を病みては却て病気を起す事とも存じ候間今年一年は専心に分析と山の調査のみに従事し別段に身体を痛めざる様勉強は控へ申すべく候

度々この様に陰気なる事のみ申し上げ誠に御申し訳け無之候

夏休前の分析は大抵七月二十日には終り申すべく候間次に山に出づる前十日位はうちにて休み申すべくその際又色々と申し上げ候

到々私も弱みを生じ終り候 就れ来春よりは気仙郡あたりにても静なる仕事に従事致したくと専ら願ひ居り候

又仮令病氣となりても只今の仕掛けたる仕事のみは幾分結末を着くるを要し候。尚私のこの事は郡へは御話し下さ

らぬ様奉願候 先は

匆々

この書簡から診察の結果を整理してみると、次の二点にまとめられる。

①岩手病院の診察―左の胸が少し悪い（軽度の肋膜炎）。山歩きは禁止。水薬と散薬をもらう。

②鈴木医学士の診察（自宅を訪問）―悪いというわけではないが罹患の可能性がある。もらった薬は服用し、山歩きの前には必ず見てもらうこと。又、週一度は診察してもらうこと、との助言がある。（この後、七月二十日付の父宛書簡によると、鈴木医師の診察を求めたところ、山歩きしても差し支えないとの事だったと記されている。）

この二回の診察によって、賢治は「私も弱みを生じ終り候」それゆえに「静なる仕事」に従事したいと考えるようになった。病いの自覚の始まりである。

賢治はこの診察を受けた日、友人の河本義行を訪ねた。河本が保阪嘉内に宛てた七月九日付書簡には「淋しい人間の実体を感じたのだ。淋しくもありよりあつまつて生きてゐる人間！／あーア淋しさがこみあげてきた／今日も今日とて、宮沢氏は肋莫（＝「膜」が正しい。原文のまま）にて家に帰った。私のいのちもあと十五年はあるまいと。淋しく限りなく淋しいひびきを持った言葉を残して汽車に乗った」とある。診察によって賢治は自分が病弱な身体であるということを自覚しただけでなく、「私のいのちもあと十五年はあるまい」と、人生の短いことを自覚したというのである。奇しくも、賢治がその生を終えたのは、この日から十五年後、三十七才の時のことだった。その生き急ぎともみえるひたむきな歩みは、あるいはこの短命の自覚ゆえなのかもしれない。

ところで賢治がこの時「肋膜かと神経を起し」―不安を覚えた「肋膜」とはどういう病気であろうか。「肋膜」とは肋膜（＝現在は「胸膜」という言葉を使っている。肺の表面と胸部の内面を覆う漿膜）に起こる炎症で、正確には「肋膜炎」のことである。原因として胸部外傷、肋骨骨折、肺結核、肺癌などがあるが、戦前においては肺結

核が圧倒的に多かった。結核は死因のトップを占める国民病であったから、結核という言葉を避けるために（診断が難しいというだけでなく）肋膜炎という言葉が使われてもいた。賢治の場合も結核であったことは間違いないと思われる。

賢治が、自分はもしかすると肋膜ではないか（あるいは結核ではないか）と不安を覚えた理由として、同宿の岩田磯吉（花巻出身で賢治の血筋にあたる）が、六月に肋膜と診断されて帰省している、という事実もあったと考えられる。父宛の書簡には「磯さん」は数日前から胸が痛むので岩手病院で診てもらったところ、肋膜と診断されたということが書かれている。賢治も自覚症状として「胃の近く」が痛むという事実があった。保阪嘉内宛書簡には「とにかく予定の地質調査丈はするつもりであります。これからさきとても私には労働らしいことはできません。一昨日等も歩きながら胸が苦しくて仕方なかったです」（七月二十五日付）とある。しかしそれだけでなく「畑をほつても二坪もほればもう絶えず憩んでばかりいる」「少し重い物を取り扱へば脳貧血を起したりする。それでもやっぱり稼ぎたくて仕方ないのです。毎日八時間も十時間も勉強しています」（推定八月付）なども記され、症状は全身的な体力不足のようにも思われ、しかもそうした中で一種の焦りのようなものを感じていたことがわかる。

この年の暮れ十二月二十六日、日本女子大に学んでいるトシが入院したという知らせがあり、賢治はさっそく母を伴って看病にかけつけ、三月三日まで東京で過ごした。トシの病気はチフスではなく、肺炎であったというが、一九二二（大正十一）年十一月に肺結核で亡くなった。そこから考えてみれば、おそらくこの大正七年暮れの病気も結核によるものだったと考えられる。

結核は飛沫感染による伝染病で啄木一家が典型的に示しているようにしばしば家族の共有する病気となっていた。啄木の場合、母カツこそ六十七才の寿命を保ったものの、長姉サダは三十才、妻節子は啄木と同じ二十七才と

いう若さであった。

宮澤家では賢治と妹トシが結核で早逝したが、他の家族は皆長命である。賢治とトシは家族が浄土真宗の信仰をもつ中で、日蓮宗を信じる信仰の同志であったが、同じ病気に苦しんだ。妹の死が賢治の文学や生き方に深い影響を及ぼしているという時、この信仰と病気を共有していたという事実も忘れてはならないだろう。

(二) 農民活動の挫折

一九一八（大正七）年、軽い肋膜炎だとの診断はあり、身体の不調はあったものの、賢治の健康はその後次第にもち直していく。賢治が「肺炎」「肺浸潤」（主治医の診断）で倒れたのは、その十年後、三十二才の時の事である。この間、賢治は幅広く読書に励み、信仰をめぐる父との対立から家出して上京（二十五才）、妹の病氣再発を聞いて帰郷、以後四年間にわたって農学校の教師として明るい生活を過ごしたものの、教師としての生活にあき足らず、依願退職して農村に飛びこみ（三十才）多彩な活動を展開する。そしてこの最後の農民活動こそ持病としてひそかにかかえていた肋膜炎をいっきよに悪化させた元凶であった。賢治がもし農学校教師として過ごしていたなら、決してあのような形で病いに苦しむことはなかったろう。その意味では、農民活動こそ「病因」であったと言える。そこで賢治の農民活動を、その健康という面から考えてみたい。

昭和二年二月一日の「岩手日報」に「農村文化の創造に努む／花巻の青年有志が／地人協会を組織し／自然生活に立返る」の見出しのもとに次のような記事が載せられた。

「花巻川口町の町会議員であり且つ同町の素封家の宮澤政次郎氏長男賢治氏は今度は花巻在住の青年三十余名と共に羅須地人会を組織し、あらたなる農村文化の創造に努力することになった。地人会の趣旨は現代の悪弊と見るべ

き都会文化に対抗し農村の一代復興運動を起こすのは主眼で、同志をして田園生活の愉快を一層味はしめ原始人の自然生活にたち返らうというのである」

賢治の農民活動は、ここでいうように、自宅での恵まれた、保護された生活を棄てて「原始人の自然生活に立ち返る」という大きな変化を伴っていた。賢治は再び（初めは父との信仰の対立―父の日蓮宗帰正を願っての上京である）豊沢町の家を飛び出し、下根子桜にあった宮澤家の別宅（それは亡きトシが病臥した家であり、賢治の実践は妹の志を継ぐことでもあった）に移り、独居自炊の生活に入る。そこでみずから慣れない百姓仕事に汗する一方で、農民の指導に全力を傾注した。

しかし、この農民活動も一九二八（昭和三）年八月をもって終わる。過労のために肺炎となり、自宅に戻り、家族の看護を受けながら病床に臥す身となったためである。農民活動の期間はわずか二年三ヶ月にすぎなかった。農村を救済せんとする高い理想は、過労と栄養失調の生活だった。

これについては多くの証言があるが、ここでは三人の言葉を引いておく。

○「宮澤先生の日常生活は私達の目からみてもほとんど無理の連続としか思えませんでした。夕飯が又極度に質素なもので蕪などを土鍋でクツクツと煮てその一品料理が夕飯のお菜でした。（中略）一坪の台所で焦げた冷たい御飯に汁をそそぎそそぎ砕きながら原形のままの沢庵漬を左手にかじりおいしかった夕飯を戴いてから二階の書齋へ上った。…床の間は書籍で埋まり戸棚には原稿が山と積まれていた。陽の明りがだんだんと月の光に代っていくにつれて先生の話はだんだんむずかしくなってきた」（羅須地人協会員の一人伊藤清）

○「僕は茄子の漬物が大好物でね。それさえあれば何もいらないます。五本も六本も食べます。ところがある日、この近くの子供に茄子二本食べたぞと言ったら、ほう一度に二本もかと言ってびっくりりされたものな。僕は百姓と

同じように暮せばいいです」(叔母岩田やすの証言する賢治の言葉)

○「花巻のまわりの村々を農事相談や肥料設計に回り歩いた賢治が、そのころ食べていたものはとてもひどいものだった。誰かにももらった塩引を台所にぶら下げておいて、冷たい御飯のおかずにした。残った骨とキャベツをぐらぐら煮てそれがまれに訪れた私に対して最上の御馳走だった。ゴマの入った南部せんべいの何枚かが昼めしだった。豆腐を村の豆腐屋の店先で食べるのが晩飯だったりした。雨に打たれて肺病になった。昭和三年八月のことである。」(盛岡中学の後輩であった森莊巳池)

裕福な「財閥」の家に生れ、経済的に何一つ不自由のなかった賢治がなぜ、自らこのような徹底した粗衣、粗食の独居生活を選び、農民の救済に命を捧げる道を選んだのであろうか。

賢治がその様な生き方をした秘密を解く鍵は、「修羅」という言葉に潜んでいる。「羅須地人協会」の「羅須」という言葉についていろいろな解釈がなされているが、これは「修羅」を逆転させた「羅修」と表記したと考えるのが最もふさわしいと思う。自分を「一人の修羅なのだ」と意識し、その修羅たる自分がいかにして「成仏」―仏になるかということは、賢治にとって大きな課題であった。「ねがはくはこの功德をあまねく一切に及ぼして普く一切に及ぼし、我等を衆生と皆共に仏道を成せん」という四弘誓願を生涯の誓いとし、十界曼陀羅(注一)を御本尊として常に身边に掛け、その前で祈っていた賢治は、「法華の行者」であり、法華経に生きるという熱烈な信仰、信念を持っていた。

農民のために己れの生命を投げ出し与えること―それは、自己犠牲的な自殺的行為とも言えるが、単なる自殺と違うのは自らを殺すことによって永遠の命を得るといふ宗教的理想に支えられていたということである。「一粒の麦もし死なずば一粒のままにてあらむ。もし死なば多くの実を結ぶべし」(ヨハネ福音書)に通じる精神がここに

はある。賢治が印刷して学校の下足箱などに入れておいた「手紙」の中に、龍の成仏の物語を述べた短編がある。力も強く毒をもってあらゆる生き物を殺していた龍はある時、良い心を起こしてこれからはもう決して悪いことをすまいと誓い、眠っている間に獵師に皮をはがれ、虫に体を食わせて乾いて死んだ龍は、死んで天上に生れ、お釈迦様になって、人々に平和を与えたという物語である。この物語の結びで賢治は「このやうにしてお釈迦様がまことの為に身をすてた場所はいまは世界中のあらゆるところをみたましました。このはなしはおとぎばなしではありません」と記している。まさに「おとぎ話」ではなく賢治の生涯がこの龍であった。

自分を修羅であると自覚し（龍はそのシンボリックな存在である）、修羅意識を逆に善へのエネルギーに転化して人々の救いのために生きる。そのことによって人々に釈迦の精神を証する。羅須地人協会の活動の根底には、そうした熱い信仰心がある。

しかし、その活動は健康という点から考えれば、自殺的、自棄的な行為であった。してみれば、その宗教的な理想、情熱こそ、賢治の肉体をむしろんだものだとも言える。そして自分の命、健康を第一義的に考え、それを守ることを何より大切なことだとするならば、無理をしない、無難な生き方をするのが良いということになる。しかし、もし賢治がそうした価値観に生きていたならば、あのようになすぐれた作品が生まれることもなかったのである。羅須地人協会の活動中の詩篇を収めた「春と修羅」第三集をみると、「疾中」につながる病気に傾いていく過程をはつきり伺うことができる作品がある。たとえば「一九二七・八・二〇」の日付をもつ次の詩。

「もうはたらくな」

もうはたらくな

レーキを投げろ

この半月の曇天と

今朝のはげしい雷雨のために

おれが肥料を設計し

責任のあるみんなの稲が

次から次と倒れたのだ

稲が次々倒れたのだ

働くことの卑怯なときが

工場ばかりにあるのでない

ことにむちゃくちゃはたらいて

不安をまぎらかさうとする

卑しいことだ

…けれどもあまたあたらしく

西には黒い死の群像が湧きあがる

春にはそれは

恋愛自身とさへも云ひ

考へられてゐたではないか…

さあ一ぺん帰って

測候所へ電話をかけ

すつかりぬれる支度をし

頭を堅く縛って出て

青ざめてこはばったたくさんの顔に

一人づつぶつつかつて

火のついたやうにはげまして行け

どんな手段を用ゐても

弁償すると答へてあるけ

一円の報酬を受け取ることもなく肥料設計を書き、しかもこの詩に伺われるように過剰とも思われるほどの真面目な責任感にさいなまれ、夢中になって農民を「励まして」歩く。その心労、過労が賢治を病気に追いやるのは当然なこととも言えた。理想にはやる賢治の行為は、町の人や、あるいは農民にさえ、必ずしも好感をもって受け入れられたわけではなかった。「林中乱思」と題する次の詩には、熱に苦しむ賢治の耳にそうした人々の批判の声が聞こえてくる。賢治はそれに激しい怒りを覚えながらも、一方では、昂ぶりがちな自分の気持ちを冷静に見つめようとする、そうした思いが綴られている。

林中乱思

火を燃したり

風のあひだにきれぎれ考へたりしてゐても

さつぱりじぶんのやうでない

塩汁をいくら呑んでも

やっぱりからだはがたがた云ふ

白菜をまいて

金もうけの方はどうですかなどと云ってゐた

普藤なんぞをつれて来て

この塩汁をぶっかけてやりたい

誰がのろろ農学校の教師などして

一人前の仕事をしたと云はれるか

それがつらいと云ふのなら

ぜんたいじぶんが低能なのだ

ところが怒って見たもの

何とこの焰の美しさ

柏の枝と杉と

まぜて燃すので

こんな赤のあらゆる phase を示し

もつともやはらかな曲線を

次々須臾に描くのだ

それにうしろのかまどの壁で

煤かなにかが

星よりひかつて明滅する

むしろこつちを

東京中の

知人にみんな見せてやって

大いに羨ませたいと思ふ

じぶんはいちばん条件が悪いのに

いちばん立派なことをすると

さう考へてゐたためだ

要約すれば

これも結局 *disjunction* の欲望の

その一態にほかならない

林はもうくらく

雲もぼんやり黄いろにひかつて

風のたんびに

栗や何かの葉も降れば

萱の葉っぱもざらざら云ふ

もう火を消して寝てしまはう

汗を出したあととはどうしてもあぶない

（語注）○普藤—元同僚の白藤慈秀と指す説もある。親しみをこめてからかったのを賢治がむきになってまじめに受けとったのかもしれない。○phase—相、段階、位相。ここでは赤の様々な色合いの相をいったものである。○須臾—しゅゆ。しばらくの間。○distinction—区別、差別、名声。ここでは名誉を求める心の意で使ったものであろう。

以上二つの詩を紹介してみたが、これらの詩には病床に臥す身となる寸前の賢治の心と肉体が描かれている。「疾中」詩篇は、この農民運動の挫折の上に、あらたに生み出された作品であった。

農学校教師としての四年間は明るい健康な時代であったが、それ以後の二年余りに渡る農民活動は、超人的な活動の中で、現実の壁の厚さを前に、もがき苦しみ身も心も、病いに向いつつあった。教壇に立ち、教科を教え、理想を説くのと違って、貧困な村の現実、農民の意識は賢治一人の力をもってしては容易に変えがたいものだった。又、賢治の抱く高い理想は、当時の人々にとって、あまりに理解しがたいものであった。

「疾中」詩篇の書かれたころの書簡をみると、そのころの生き方への苦い反省が静かに語られている。

「ご元気のおやうすで実に安心いたしました。無理をしないで着々進んで行かれることをどんなに祈ってゐたでせう。農事のこともおきさしたいことばかりですが四月はきつと外へも出られますからお目にもかかれますと思ひます。根子ではいろいろお世話になりました。たびたび失礼なことも言ひましたが、殆どあすこでははじめからおしまひまで病氣（ごころもからだも）みたいなもので何とも済みませんでした。どうかあれらの中から捨てるべきははっきり捨て再三お考えになってとるべきはとって、あなたご自身で明るい生活の目標をおつくりになるやうねがひま

す」(昭和五年三月十日 伊藤忠一宛書簡)

「私も農業校の四年間がいちばんやり甲斐のある時でした。但し終りのころ(Ⅱ農民活動をした二年余りのころを指していると思われる。農学校教師から農民活動へという変化は、賢治の意識において、同一線上にあるものだった)わづかばかりの自分の才能に慢じてじつは虚傲な態度になってしまったこと悔いてももう及びません。しかもその頃はなほ私には生活の頂点でもあったのです。もう一度新しい進路を開いて幾分でもみなさんのご厚意に酬いたいとばかり考へます」(昭和五年四月四日 沢里武治宛)

(三)「疾中」時代の病い

一九二八(昭和三)年夏、稗貫地方は四十日にも渡って旱天が続き、稲熱病が発生した。賢治は観測所に天候を問い合わせ、農民の稲作指導に奔走する。しかし、八月十日、過労のあげくについに倒れてしまう。もはや独居自炊の暮らしもならず、根子の別宅から、実家の別棟に、家族の看護を受けながら療養する身となる。この時の主治医は花巻共立病院の佐藤長松博士で、両側の肺浸潤という診断であった。

九月二十三日付の沢里武治宛書簡には「八月十日から丁度四十日間熱と汗に苦しみました、やっと昨日起きて湯にも入り、すっかりすがすがしくなりました。六月中東京へ出て毎夜三四時間しか睡らず疲れたままで、七月畑へ出たり村を歩いたり、だんだん無理が重なってこんなことになったのです」と書いている。熱や汗は四ヶ月程続いて幾分おさまったものの、十二月になると、今度は寒さのため風邪をひき、突然高熱を出し急性肺炎と診断された。この時、賢治は妹夫婦(クニ、主計)の好意で、二階の日当りの良い部屋に移り、以後、その部屋を病室として病いを養う暮らしが続く。「雨ニモ負ケズ手帳」の中で、「昭和三年の十二月私がああ室で急性肺炎になりまし

た時／新婚のあの子の父母（Ⅱクニ夫妻）は／私にこの日照る広いじぶんらの室を与え／じぶんらはその暗い私の四月（Ⅱ八月から十一月まで、四ヶ月の病床期間）病んだ室を入れて行ったのです／そしてその二月あの子はあそこで生まれました」と記されているのは、この間の出来事を詠んだものである。

十二月中に出された書簡には「この頃又もや三十八に逆戻り致し病中乱筆御免被成下度候」（十二月二十一日付高橋慶吾宛）とか「この度の自ら招いた病気に就てもいろいろとご心配下さいまして何とお礼の申しあげやうもございませぬ。何分神経性の突発的な症状でございましたためこの八月までもこの冬は越せないものと覚悟」（十二月、宛先不明の下書）などという記述がみえ、八月に倒れた時、すでに冬を越せない身体だと感じていたことが知られる。「疾中」詩篇は、この生命の危機意識の中から生み出された作品群である。（一九二九年二月）と表題の箇所記された詩に「われやがて死なん、今日又は明日」とあり、「一九二九・四・二八」と記された「夜」という詩にも「これで二時間咽喉からの血はとまらない」とある。冬は越して春にはなったものの、病状は容易にはおさまらなかつたのである。

小笠原露（Ⅱ近くの同心町に住むクリスチャンの教師で、賢治に好意を寄せて頻繁に羅須地人協会を訪れていた）宛書簡の下書（昭和四年と推定されている）には、次のような言葉が見える。

「根子では私は農業わづかばかりの技術や芸術で村が明るくなるかどうかやってみて、途中で自分が倒れた訳ですがこんどは場所と方法を全く変へてもう一度やってみたいと思つて居ります。けれども左の肺にはさっぱり息が入りませぬしいつまでもうちの世話になつてばかりも居られませぬからまことに困つて居ります。

私は一人一人について特別な愛といふやうなものは持ちませぬし持ちたくもありません。さういふ愛を持つもの

は結局じぶんの子どもだけが大切といふあたり前のことになりますから」

この書簡はおそらく小笠原露との結婚を婉曲的に断わるための書簡と推定されるが、特定の一人の女性を愛さない―結婚しないということは、賢治の信念ともいえるものだった。賢治のこうした考えを聞き、この女性も「独身主義」を通したいということを言ったようである。しかし間もなく、それをやめたということを賢治に報じた。それに対して賢治は、どうぞ結婚して下さい。ただし「信仰は断じてお棄てにならぬように」「科学がわれわれの信仰に届いて来ます」と書き（日付不明の下書による）、「独身でも明るく」というのは「特別な条件」がなければできないようだ」と記している。その「条件」として括弧書きをして、「私の場合では環境即ち肺病、中風、質屋など、及び弱さ」が、それだという。賢治が生涯独身であったことは、その生き方、健康という点からみても大きな問題だったと思うので、その理由を考えてみたい。

この括弧書きの中で「中風」というのは、昔の使い方「古くは風気に傷つけられたものの意で、風邪の一症」（広辞苑）とあるのが、該当すると思われる。従って「肺病」、「中風」は共に、その呼吸器管に問題のあったことを意味するものであろう。独身を選ぶ理由として第一に上げられているのがこの病気だということである。続いて第二に社会的な事情として「質屋」ということが上げられている。これは貧しい農民を相手として財をなしていると感じていることからくる「劣等感」とみるべきものであろう。母木光宛書簡にも「何分にも私はこの郷里で財ばつと云はれるもの、社会的被害のつながりにはいつてゐるので、目立ったことがあるといつても反感の方が多く、じつにいやなのです。じつにいやな目にたくさんあって来てゐるのです」（昭和七年六月二十一日付）と記している。

第三に上げられているのが「弱さ」である。これは賢治が自らを「優柔不断」な人間としてみていたこと、あるいは実社会の勝者として生きることが嫌っていたこととも結びついていよう。それは裏返しして言えばやさしさ、

思いやりの心とも言える。賢治が独身を「主義」として、明確な一つの主張として貫いたのは、根本としては、後述するように報恩の観念（仏陀・菩薩の大慈悲に報いることと両親の愛に報いること）のゆえであるが以上のようなことも、その背景にはあった。

幾分話がそれたが、一九二八（昭和三）年から翌年春にかけて、賢治は生命の危機に立たされていたことが「疾中」詩篇（の日付）や書簡からわかる。やがて秋になって、病状は幾分回復し始め、「近日漸くに病勢怠り多少の仕事も致し居り候間何卒御安心願上候」（一九二九年九月十八日付齊藤貞一宛書簡）と書いている。

翌一九三〇（昭和五）年になると「お蔭で療りました。お序でお目にかかりたいですが」（一月一日）とか「病気をいいことにしてご無沙汰ばかりいたり居り何とも済みません。それでも昨今はお蔭様で日中は大分机に向って居れるやうになり、またぞろ肥料の設計や石灰のことなどごそごそはじめて居ります」（二月）などという書簡の言葉でわかるように、順調に回復に向いつつあった。高橋忠治宛三月六日付の書簡には「昨年はまたわざわざお見舞い下すって何とも有り難う存じます。お蔭でいまはもうすっかりよく体温も三十七度以下脈も七十五以下になり半日ぐらゐづつは起きてゐます。ただ目方が十一貫（＝四一・三キロ）しかないやうな訳でそれもだんだん恢復するかと思ひます。まったくこの度はみなさんのお蔭で命を拾ったやうな次第です」と記しているように、病いを乗り越えた、という自覚を深めていった。

賢治の病気は肺浸潤、又、肺炎という診断であったが、実は結核ではないのかという疑いは常にもっていたのであろう。

「オルガン奏法別便で送りました。病気以来手もふれませんでしたし病気もたうたう結核にはなりませんでしたが

念のため充分消毒しましたから安心してお使ひ下さい」(四月四日) という書簡は相手が不安に思うだろうからという気づかいばかりとはいえない。死の前年(昭和七年)の書簡には「病質はよく知りませんが肺炎、全胸の気管支炎、肋膜の古傷、昨秋は肺炎、結核も当然あるのでせう」(十月十日)とあり、この時はすでに結核の身だということを観念して受け止めている。言葉では否定しても、結核でないかとの恐れは長い間賢治の心の中にずっと潜んでいたものと思われる。

夏になると「お蔭様で私も今はすっかり常態に復し今年中だけ豊沢町で店を手伝ったりいままで書いたものを整理したりしてゐるつもりです」(八月二十日付) などという言葉からわかるように健康に自信をつけ、この冬を越したら完全に起き上がって新しい仕事につきたいと考えるようになった。医師もこの冬さえ越せば何をしてもいいということだった。新しい仕事とは東北砕石工場の技士となり、土質改良のため岩酸石灰を普及するという仕事だった。自ら畑を耕し、農民を指導することが困難だと考えた賢治は、側面から農民を支援する道を考えていたのである。一九三一(昭和六)年、新年を迎え、賢治の心にはあらたな意欲が湧いていた。「私もどうやらもと通りのからだになりました。四月からまた飛び出すつもりです」(一月一日付書簡)と書いている。それは「疾中」詩篇の時代に別れを告げるものだった。

二、「疾中」詩篇の概略

賢治没後、残された原稿の中に黒クロースの表紙に「疾中」[81928-1930 65]と記され、三十篇の詩篇が一括して収められていた。数字は一九二八(昭和三)年八月から一九三〇(昭和五)年に至る病中の作品だ、という

ことを示したものであろう。(末尾の「55」という数字は不明で、原稿の枚数かともいわれている)「疾中」詩篇がこの題のもとにまとまった形で読めるようになったのは、筑摩書房昭和三十一年版全集からで、それまでは「肺炎詩篇」とか「臨終の詩」とかいった題が用いられていたという。賢治の自筆で表紙に記された「疾中」の文字、そして日付、それに挟みこまれてあった作品群——このことの示す意味は大きい。「疾中」という言葉も単に病中に生まれた作品という、メモ的な、軽い記述ではなく、病いから回復したと信じた賢治が、二年五ヶ月にわたる病床の作品を読み返し、その原稿の配列まで考慮して並べ、整理し、表題としてつけられた詩集の題ではなかったろうか。一九二四(大正十三)年「春と修羅」を刊行した賢治は、その後まとまった詩集を発行することはなかったとはいえ、一九二七(昭和二)年「春と修羅」第二集の序を書き、出版を考えていた。同じく農民活動期の「疾中」直前の時期の作品)を「春と修羅」第三集としてまとめようとしていたことも知られている。「心象スケッチ／春と修羅／第三集／未定稿／発表不可」と黒クロース表紙の表紙に記されていたことは、未定稿ゆえ発表できないまでも、一区切りの詩集として完結させようとしていたことを示すものである。「疾中」もこの延長線において考える必要がある。端的に言って、「春と修羅」第四集ではなく「疾中」と題したのは、その高く掲げた理想が自らの病いによって挫折したということを示しているのではなからうか。

「疾中」詩篇はこのようにして残された三十篇の詩篇であり、いずれも生前未発表のものである。うち一篇は未完成であるが(完成稿が紛失した可能性もある)、あとはいずれも完成されたものであり、作品の配列も単に制作順ということではなく、後述するように一定の意図があったのではないかと推察される。もちろん詩は論文などと違って、その時々思いに触発されて、自然に生れるものであろうが、生み出された作品をどう整理しまとめるか、という点では編集意識も働く。

「疾中」詩篇はわずか四行、五行の、間誦風のものから（短いとは言え、これらは決して断片ではなく、作品として完結している）三十行近くのものまで、様々であるが、賢治のそれまでの詩が総じて長いものが多かったのに対して、きわめて短くなっているということが特徴として指摘できるだろう。あの賢治独特の饒舌体ともいべき詩のスタイルが失せて、無駄のない、簡潔な、引締まった詩が多くなっている。

三十篇の詩は、口語詩十三篇、文語詩十六篇、両者の混合したものが一篇となっている。「春と修羅」第三集までの詩はほとんど口語詩であるから、文語詩の登場という点でも「疾中」は大きな変化を見せているということになる。そしてこれは、賢治がその死の直前に浄書、完成した「文語詩稿五十篇」、同じく「文語詩稿百篇」（いずれも一九三三年八月）に繋がる作品であり、「疾中」詩篇は口語詩から文語詩へのターニングポイントに位置する。

詩の内容からみると、「疾中」の題が示す通り、病氣とそれにつながる死への思いや、信仰の表白も、これ迄の詩には見られない大きな特徴である。「風とゆききし雲からエネルギーをとれ」と山野を跋涉した詩人も、今や閉ざされた病室で、熱と汗に喘ぎ、出血におびえ、死の不安と戦いながら生きねばならなかった。その時、より所となったのは、病室に吹いてくる風や又戸外の風の音であり、菩薩を念じ、信仰心を固めるということであった。

風をモチーフとする詩は口語で書かれているが、信仰に関わる詩は文語になっている。この点について、小沢俊郎は「口語詩では、現在の時点から具体的即物的に内景外景を含めた心象を描いているのに対し、文語詩では、普遍的な時間の目に立って現実を越える宗教的形而上的な思念を述べている」（「疾中」と「文語詩」と）指摘している。

口語詩とはいえ、それは「春と修羅」時代の自然科学と仏教の世界観とを統合した宇宙意識に立つ心象スケッチ、「春と修羅」第二集の現実的・社会的意識の現われ、「春と修羅」第三集の実生活に即した生活詩などとも違った、あらたな作風の誕生が伺われる。それは「春と修羅」第三集の「林中乱思」に見られた怒りが消えて、病いの安ら

ぎや諦念が見られるようになるということである。もちろん、病いや死の意識は常に肯定的に語られているわけではなく、その不安もあり、病いと戦おうとする強い意志もみられるのであるが、それにしてもまさに「疾中」という題のごとく、病いこそ賢治の詩のあらたなテーマとして湧き出てくるのである。文語詩にしても、この病いや死の意識が一つのテコになって、菩薩を求め、その信念を吐露するという方向に行くのであって、口語詩と文語詩が並行的なものでなく、同じ病いという源から発せられていることがわかる。

小沢俊郎は、口語詩を次の四つに分類している。

- ① 胸を蝕まれ高熱に苦しむ重い病状そのもののイメージを描いた作品
- ② 自然への畏怖をテーマとした作品
- ③ 自然への憧憬をテーマとした作品
- ④ 自然への畏怖と憧憬の混在した作品

これも一つの試案であろうが、私は「疾中」詩篇はすべて根底に賢治の病い（医学としての「病氣」）に対し、不安や葛藤などを含めた内面としての「病い」体験があり、そこから溢れ出したものだと考える。その点から、並行的にその詩を分類するよりも、病い体験の中から生れたイメージ、幻想、情念、思索として、「風」「死の不安・恐怖」「菩薩」「南無妙法蓮華經」という四つの核があると見た方がよいのではないかと思う。以下、この四つの核を柱として、その詩を考察してみよう。

三、風

「疾中」詩篇の中で風が重要なモチーフとなっているのは、「病床」「眼にて云ふ」「風がおもてで呼んでいる」「まなこをひらけば四月の風が」(注二)の四篇である。「風と行ききし雲からエネルギーをとれ」とか「聖波瑠の風が吹く」などという詩句が示すように、風や雲と交歓し、その力を自分のエネルギーとして再生をはかり、風によって魂を浄化した「春と修羅」の詩人にとって、病床の今もなお、風は大きな力の源泉であり、外の風に憧れると同時に、部屋のうちに通う風の流れを敏感に感じとり、これを喜んだ。

病床

たけにぐさに

風が吹いてゐるといふことである

たけにぐさの群落にも

風が吹いてゐるといふことである

〔語注〕○たけにぐさ―竹似草、竹煮草。山野に自生する多年草で高さ一〜二m、葉はハート形で夏白い小花を咲かせる。中空の茎が竹に似るとか、竹と共に似ると竹が柔くなるなどいわれる所からその名があるという。

平易な単純な詩句の繰り返しの中に深い思いがこもっている。題の「病床」が決定的に重要である。家人が、外

には強い風が吹いていると何気なしに言ったのでもあろうか。必ずしも「けにぐさに風が吹いている」ということを取り上げたのでなく、外の様子をいろいろ語りながらふと、たけにぐさにも風が吹いているなどということをつたのかもしれない。たけにぐさは、丈も高く群生するから、すすきに吹く風が目立つように、人目を引くこともある。賢治はその言葉を耳にし、二度これを繰り返し、単純ながら印象深い、余韻のある一篇とした。この詩には、外界に対する切ない憧れが潜んでいる。正岡子規に「幾度も雪の深さを訪ねけり」「障子あけよ上野の雪を一目見ん」などといった句があるが、病中であって外の自然に憧れるのは、おそらく病者の切ない願望である。子規の雪、賢治の風には病床の閉ざされ停滞した雰囲気、鬱を払いのける自然への賛美と憧れが潜んでいる。この詩が「疾中」の冒頭に置かれているのは、「春と修羅」の詩人が、もはや屋外の自然の中で己れを解放することもならず、静かな、寂しい憧れを持って「病床」に生きるしかないことを示すものであり、おそらくプロローグとして意識的に置かれたものではなからうか。この詩の次に置かれているのが次の「眼にて云ふ」という詩であり、同じく風をモチーフとしている。

眼にて云ふ

だめでせう

とまりませんな

がぶがぶ湧いてゐるのですからな

ゆふべからねむらず血も出つづけなもんですから

そこらは青くしんしんとして

どうも間もなく死にさうです

けれどもなんといい風でせう

もう清明が近いので

あんなに青ぞらからもりあがって湧くやうに

きれいな風が来るですな

もみぢの嫩芽と毛のやうな花に

秋草のやうな波をたて

焼痕のある藺草のむしろも青いです

あなたは医学会のお帰りか何かは知りませんが

黒いフロックコートを召して

こんなな本気にいろいろ手あてもしていただければ

これで死んでもまづは文句もありません

血がでてゐるにかかはらず

こんなのにんきで苦しくないのは

魂魄なかばからだをはなれたのですかな

ただどうも血のために

それを云へないがひどいです

あなたの方からみたらずるぶんさんたるけしきでせうが

わたくしから見えるのは

やつぱりきれいな青ぞらと

すきとほった風ばかりです。

〔語注〕○清明 二十四節氣の一。春分後の十五日目。太陽曆では四月五日ごろ。○嫩芽 音読みでは「ドンガ」。訓読みすると「わかめ」。この詩の場合、訓読みの方が適切であろう。「嫩」は若くてやわらかいことをいう。嫩草（ドンソウ。わかくさ）○草 Ⅱイグサ科の多年草。湿地に自生。又水田に栽培する。円柱形の茎は細長く、地上約一メートル。茎は花むしろ、豊表、ゴザなどにする。○魂魄 Ⅱたましい、靈魂。「魂」は陽、「魄」は陰とされ、又「魂」は精神の働き、「魄」は肉体的生命をつかさどる活力とされる。人が死ぬと「魂」は遊離して天井に上るが、「魄」はなおしばらく地上に残ると考えられていた。

「眼にて云う」という題は、口からの出血のため、物を言うことができなないので、自分の今の気持ちはこんな思いです、と詩の形にして眼で（読んでもらって）伝えますという意味である。といってももちろん、この詩を直接医師に見せたわけではないが、その眼には感謝の思いと、すがすがしいばかりのやすらぎにあふれていたと思われる。しかし、あるいは又、詩にいうように「さんたんたるけしき」ゆえ、医師も思わず目をそむけ、その心を理解することなどできなかつたのかもしれない。であればなお一層、この詩のもつ意味は大きい。外観はどんなにむごたらしく、惨めに見えようと、心は、それとは別に、静かな落着き、安らぎに満ち感謝の思いにあふれているというところもあるらしい。私達はこの詩によって、そうした病者の心理に触れることもできる。

少し立ち入ってこの詩を味わってみよう。

「だめでせうとまりませんな」―詩はいかにも親しみのこもった口調で始まる。礼装をして回診に訪れた医師へ

の語りのスタイルがこの詩に、あたかも賢治の肉声を聞くような温かさをもたらしている。賢治は医師に、そしてこの詩を読む読者に何を伝えようとしたのか。

冒頭から「死にさうです」まで、ここで賢治はがぶがぶ湧き出し、昨夜から一睡もできなかったことから、もうだめであろう、死が近いのだろうという。しかし、こうしたむごたらしい悲惨な状況とは対照的に、「けれどもなんといい風でせう」と風の讚美、うっとりするような風の心地良さを述べる。自分のみじめさを忘れ、風に酔う賢治の姿がここにある。「清明近く」の、青ぞらから湧く「きれいな風」は、もみぢの嫩芽、毛のような花を波立てて賢治の病床にまで入ってくる。おそらく賢治は家人に頼んで二階の病室の窓を開けてもらっていたのだろう。熱や汗のおいも、その風に洗い流され、心の中にまでその風が吹きわたるのを覚えた。心の安らぎを覚えている賢治はここで、医師の親切な手当に心から感謝し、こんなにしてもらって本当に有難いことだ、これほどまでしてもらったのだから死んでもかまわない、とさえいう。しかもそれを堅苦しい礼儀としていうのではない。死にそうな状態であるにもかかわらず、のんきで苦しくないのは、もはや死んでしまつて「魂魄」がすでに身体を離れてしまつたためであろうか、と軽い冗談をもつて語る。しかし、「ただどうも血のために」今の自分の思いを告げることができない。だから眼で（詩によつて）伝えるのだという。

それにしても「さんさんたるけしき」を呈していたはずの賢治の心が、かくまで安らかで落ちついてるのはなぜか。死という最も受け入れがたい、恐怖と不安の対象とされるものが、かくまで平然と受容できるのはなぜか—この詩から伺われることは医師の親切な「手当」のためである。確かに医師の親切に感謝し、これほどまでしてもらつて助からないのであれば、それも一つの運命として受け入れざるをえないという思いもあつたであろう。しかしそれ以前に、賢治がこうした安らぎのうちに死を迎えることのできるより根本的な理由は、「きれいな風」「す

きとほった風」のためではなかったろうか。吹く風に我を忘れる時、たとえ一時にせよ、自然そのものと一つに溶け合ってしまうのではなからうか。ここには、弟の清六に宛てて「われわれは楽しく正しく進まうではありませんか。苦痛を享樂できる人はほんたうの詩人です。もし風や光のなかに自分を忘れ世界がじぶんの庭になり、あるひは惚として銀河系全体をひとりのじぶんだと感ずるときはたのしいことではありませんか」(大正十四年九月二十一日付)と語った賢治がまだ生きてるように思われる。

「眼にて云ふ」は、次の「S博士に」という詩を推敲・完成させてなったものである。

S博士に

だめでせう

とまりませんな

どうもがぶがぶ湧くですからな

ゆふべからねむられず血も出つづけなもんですから

そこらは青くしんしんとして

どうも間もなく死にさうですな

けれどもなんといい風でせう

もう清明が近いので

あんなに青ぞらから湧くやうに

きれいな風が来るですな

もみぢの嫩芽は

まるでやさしい花のやうですし

あなたは黒いフロックコートを召して

こんなに本気にみてくださった

それもあなたの病院の

花壇を二年いぢつただけの関係で

これで死んでもどこに文句がありません

こんなのにんきで苦しくないのは

わたくしのたましひすでにからだをはなれたのですかな

ただどうも血のために

それを云へないがひどいですな

あなたの方からみたらずるぶんさんたるけしきでせうな

わたくしから見えるのは

やっぱりすき透った青ぞらばかりです

この「S博士に」の下書原稿をみると「この血はたしか肺の方ではなくて／敗血症の方で」という一節があり、そこに斜線が引かれて削除されている。削除はされたものの、この一節は、賢治のこの時の病気が何であったかを示しているわけで、この時診察にあたった佐藤隆房によれば「壊血症」と言ったのを賢治が聞き違えたもので、出血は栄養失調特にビタミンの欠乏からくる壊血症で、肺結核からくる咯血ではなかったと記している。(注三)

この先駆形の詩と「眼にて云ふ」を比べてみると、主な違いは次の二つである。

第一に題が改められている。これは「疾中」詩篇中、すでに「S博士に」と題された詩があるから一方を改めたということであろう（このことも又「疾中」が一冊の詩集をめぐらしていることを傍証するかもしれない）。「眼にて云ふ」と題は変えられても「S博士に眼にて云ふ」ということであり、その点では変りないのである。

第二に先駆形にある「それもあなたの病院の花壇を二年いぢただけの関係で」という、具体的に賢治との関係を示す言葉が「眼にて云ふ」では削られていることである。これは自分がやったことを吹聴したくない謙虚な心の現われとも考えられるし、医師の親切が賢治への恩返しとも思われかねないことへの配慮であろう。

「疾中」詩篇の「S博士に」と題された詩は次の作品である。（先駆形は省略）

S博士に

博士よきみの声顫ひ

暗きに面をそむくるは

熱とあへぎに耐へずして

今宵わが身の果てんとか

ああ勇猛と精進の

ねがひはつねにありしかど

あしたあしたを望みつつ

早くいのちは過ぎにけり

しかればきみが求むらん

奇蹟はわれが分ならず

ただ知りたまへちちははに

そむけるはかくさびしく死する

(口語訳) 博士よ、君の声がそんなにも震え、闇に顔をそむけるのは、熱と喘ぎのため、今宵私が死ぬからであるか。(わが半生をふり返ってみれば) ああ、勇猛心と精進をもって生きぬこうとの願いは常に持ち続けたが、明日こそ明日こそと夢みているうちに、すでに我が人生も終わろうとしている。だから、あなたの求めている奇蹟など、この自分には望むべくもない、分に過ぎたことなのだ。ただ一つだけ知って頂きたいこと——それは自分がこれまで父母に背いて、今こうして寂しく死んでいくのだ、ということである。

死を意識して自分の生涯を回想する心、又、両親に自分のわがままを許してほしいと願う心、こうした思いは「疾中」の病いから立ち上がり、再び倒れてから後に書かれた「雨ニモ負ケズ手帳」や文語詩の重要なモチーフとなっている。その意味で、この詩は、次の文語詩五十篇、百篇につながるテーマを内包している。

風をモチーフにする詩ということで「病床」「眼にて云ふ」を紹介し、そこから「S博士に」という詩へと幾分回り道をしたが、再び風の詩を取り上げてみよう。

〔まなこをひらけば四月の風が〕

まなこをひらけば四月の風が

瑠璃のそらから崩れて来るし

もみぢは嫩いうすあかい芽を

窓いっばいにひろげてゐる

ゆふべからの血はまだとまらず

みんなはわたくしをみつめてゐる

またなまぬるく湧くものを

吐くひとの誰ともしらず

あをあをとわたくしはねむる

いままたひたひを過ぎ行くものは

あの死火山のいただきの

清麗な一列の風だ

この詩は、特に前半部は「眼にて云ふ」とかなり似ているが、「疾中」詩篇の配列でみると大分離れた場所に置かれている。その理由として「眼にて云ふ」は「どうも間もなく死にさうです」とは言うものの「のんきで苦しくない」余裕があつたのに対して、この詩では「みんなわたくしをみつめてゐる」という死の切迫感が感じられ、確かに風の詩ではあるものの、死に連なる思いに中心があるためかもしれない。風の中に死ぬ清冽な心境が、この詩にはうかがわれ、この詩の後に、「夜」とか「疾中」などという死をテーマとした詩が続いていることを考えれば、死の不安や安らぎをモチーフとした作としてここに置いたということも考えられる。死火山の頂から吹いてくる清

麗な風に吹かれ、その中で眠る、そして死ぬ安らぎ。死はもはや戦うべき相手ではなく落ちついて受け入れるべきものである。風に同化する時、恍惚として我を忘れる。我を忘れる者に生も死もないのである。こうしてみていくと、これらのきわめて平明とも思われる詩の奥に賢治の、謎のように深い風体験がある。人並みはずれて豊かな風に対する感受性がある。次の詩にしても、言葉は平易であるが、その内的感情、風との共感は深く、余人の理解しがたいものであろう。

〔風がおもてで呼んでゐる〕

風がおもてで呼んでゐる

「さあ起きて

赤いシャツと

いつものぼろぼろの外套を着て
早くおもてへ出て来るんだ」と

風が交々叫んでゐる

「おれたちはみな

おまえへの出るのを迎へるために
おまえへのすきなみぞれの粒を
横ぞっぱうに飛ばしてゐる

おまえへも早く飛びだして来て

あすこの稜ある巖の上

葉のない黒い林のなかで

うつくしいソプラノをもった

おれたちのなかのひとりとして

約束通り結婚しろ」と

繰り返し繰り返し

風がおもてで叫んでゐる

先に紹介した二篇の詩が、外から病床の賢治に吹いてくる風―膚に感じられた風に触発された詩であるのに対し、この詩は風の音に触発されて作られている。表―部屋の外で吹く風は賢治に起き上がってぼろの外套を着て、みぞれの中に飛び出し、私と結婚しろと呼んでいるように、叫んでいるように聞こえるという。風が賢治を誘惑してやまない。それは賢治の、外に出て風に吹かれない思いの反映である、と合理的には言うこともできよう。しかしそうではない。賢治は明らかに風のあまりに強い誘いを受けているのだ。「美しいソプラノ」の音を立てて吹く風は、あたかもうら若い魅力的な女性のように賢治を誘惑してやまない。しかし、冷たい「みぞれの粒」「葉のない黒い林」でうなるその風は、死の世界からのものであり、風と結婚することは、風と一つになって死ぬことをも意味している。「結婚しろ」は風とのエロスの交わりを暗示する。エロス―恍惚として我を忘れて風（自然）と一体になろうとする情動と、タナトス―死への恐れと結びついた憧れが結びつく。風に憧れ、生に憧れる賢治は、ここで死の誘惑も受けていたのではなからうか。禁欲者賢治は、一人の女性とではなく風と交感、交流しあった。それは健康な力にあふれた時は、原始的な歓喜であったが、死を痛切に意識している今、深い死の闇への憧れを内に秘め

ているように思われる。

四、死の不安・恐怖

雲や風は賢治にとって、自らを生かすエネルギーとして感じられていたが、病んで死を意識している今、あらたな相貌をもって迫ってきた。その不安は自然そのものもつ形象として描かれ、自然は畏怖の対象となる。たとえば、次の詩。

〔その恐ろしい黒雲が〕

その恐ろしい黒雲が

またわたくしをとらうと来れば

わたくしは切なく熱くひとりもだえる

北上の河谷を覆ふ

あの雨雲と婚すると云ひ

森と野原をこもごも載せた

その洪積の台地を恋ふと

なかばは戯れに人にも寄せ

なかばは気を負ってほんたうにさうも思ひ

青い山河をさながらに

じぶんじしんと考へた

ああそのことは私を責める

病の痛みや汗のなか

それらのうづまく黒雲や

紺青の地平線が

またまのあたり近づけば

わたくしは切なく熱くもだえる

あゝ父母よ弟よ

あらゆる恩顧や好意の後に

どうしてわたくしは

その恐ろしい黒雲に

からだを投げることができよう

ああ友たちよはるかな友よ

きみはかがやく穹窿や

透明な風 野原や森の

この恐るべき他の面を知るか

〔語注〕○洪積の台地Ⅱ洪積世に形成された扇状地、三角州などが隆起してやや侵食されたもの。ここでは北上山地を指している。○穹窿Ⅱきゅうりゅう。中央が高く弓形をなすところから半球状に見える天空。

疾中詩篇には「恐ろしい黒雲」「黒き林」「黒暗のかなたより」「葉のない黒い林の中で」「黒き活字」などという例が示すように、「黒」という言葉が繰り返し象徴的な意味をおびて現われている。この詩には賢治の、死におびえる不安な心理が黒雲や野原、森と一つになって描かれている。病床の賢治は窓の外の黒い雲を眺め、その黒い雲にわが命を奪われるように感じて、おびえ、苦しみ、悶えている。そこからかつて健康であったころ、山河を跋涉しながら、あの雨雲と結婚するのだ、北上山地に恋しているのだ（雨雲と結婚すること、北上山地に恋することは、共に自然との喜ばしい一致、大地との融合感、一体感の表現であろう）と冗談を言い、半ばは、青い山河を自分のようにも感じていたことを悔しく思い出す。燃えるような信仰をもって山々を巡り歩いていたころの賢治は、確かに風や雲と一つになり、そこからエネルギーの充滿してくるのを感じていた。賢治にとって雲も風も、風流なものとして感じる対象ではなかった。「わが雲に関心し／風に関心あるは／ただに観景の故のみにはあらず／そは新なる人への力／はてしなき力の源なればなり」（「わが雲に関心し」というように、そこから力を汲みとることのできる力の源泉であった）。

しかし、病床に臥す今気づいたのは、その自然が反面において、死の相貌をもつ「うづまく黒雲」であり、「紺青の地平線」をもつて賢治をおびやかすものだったということである。自然は、善なるもの、聖なるものとしてだけ存在するわけではない。死も又自然の一面である。しかし、父や母、弟の深い愛情を思えば、どうしてその雲に身をゆだね、死ぬことができよう。今死んではならぬ、という熱い思いが湧き上がる。そう思うにつけてもあらたに、風や野原、森、一切のものが死すべきものとしてあったのだということをお問せざるをえない。「君は知っているか」という問いかけは賢治の自らへの問いかけでもあった。

一般には、艶めかしい、夢幻的なものとされたりする春の夜も、今の賢治にとって、死の不安のうちに闘う一夜

であった。たとえば次の「夜」と題する詩。

夜

これで二時間

咽喉からの血はとまらない

おもてはもう人もあるかず

樹などしづかに息してめぐむ春の夜

こここそ春の道場で

菩薩は億の身をも棄て

諸仏はここに涅槃し住し給ふ故

こんやもうここで誰にも見られず

ひとり死んでもいいのだと

いくたびさうも考をきめ

自分で自分に教へながら

またなまぬるく

あたらしい血が湧くたび

なほほのじろくわたくしはおびえる

〈語注〉 ○道場―狭義には釈迦が悟りを開いた場所、即ちブツダガヤ―菩提樹の下の金剛座をいうが、一般には悟りを得るための修行の場（寺や武道場も含む）をいい、法華経如来神力品第二十一には、法華経を讀経読誦書写

したりする場所は、どのような場所であっても道場だと説かれている。賢治は国柱会の会員として「道場観」と呼ばれる次の句を唱えたり、書写したりしていた。「当知是処 即是道場 諸仏於此 得三菩薩 諸仏於此 轉於法輪 諸仏於此 而般涅槃」(まさに知るべしこの処は、すなはちこれ道場なり。諸仏ここにおいて、三菩薩を得、諸仏ここにおいて、法輪を転じ、諸仏において般涅槃したまふ)。(六十七ページ参照)短歌に「ここはこれ／惑ふ木立のなかならず／しのびをならふ／春の道場」(六四一)があり、賢治はこの短歌の作られた二十一才の時、すでに人生を道場、忍欲、忍苦、忍辱の道―仏法を修める道場として捉えていた。その十年余り後の今、病いの中にあつて菩薩や諸仏は苦しみを経て悟りに達したのだということを感じ起している。○涅槃―あらゆる煩惱の吹き消した状態。生死・輪廻の対立概念として理想の境地をいう。そこから転じて釈迦、又は聖者の死(入滅・入寂)をいうこともある。

「夜」という題が印象的である。夜は恐怖や不安の時である。まして咽喉から二時間も出血が続いている。不安で過敏になった神経には春の夜更けの呼吸さえ静かに聞こえてくる。だが、この恐怖と不安の世界、今自分のいるこの場、それも又そのまま道場である。それを思えば、自分は今夜孤独のうちに一人死んでいいのだと幾度も腹を決め、自分に言い聞かせる。賢治はこのように、死の恐怖や不安に対して、菩薩を思い、信仰を固めることによつて乗り越えていこうとした。しかし、菩薩、諸仏にならつて死んでもいいのだと覚悟し、生を断念しながらも、なお生理的な不安・恐怖は襲う。これは信仰と自然との対立・葛藤である。ここには信仰によつて得られる安心とか悟り、とりすました落ち着きや安らぎはない。信仰はその意味では無力のように見える。信仰よりも、自然な本能がまさっているようにも見える。しかし後で述べるように、賢治は死を乗り越えるものとして信仰を求め、死の深み

の中で一層、徹底的に己れの信仰を問うことにもなった。

病中

これはいったいどういふわけだ

息がだんだん短くなって

いま完全にとまってる

とまってるると苦しくなる

わざわざ息を吸ひ込むのかね

…室いっばいの雪あかり…

折角息を吸ひ込んだのに

こんどもだんだん短くなる

立派な等比級数だ

公比はたしかに四分の三

睡たい

睡たい

睡たい

睡たいから睡ってしまへば死ぬのだらう

まさに発奮努力して

断じて眼を！ 眼を！！ 眼を!!! ひらき

さやう

もいちど極めて大きな息すべし

今度も等比級数か

こいつはだめだ

誰に別れるひまもない

もう睡れ

睡つてしまへ

いや死ぬときでなし

発奮すべし

眼をひらき

手を胸に副へ息を吸へ

…母はくりやで水の音…

〔語注〕 ○等比級数—ある数に、次々に一定の数を掛けて作られる数の列。等比数列ともいう。一定の規則で並べたもので四分の三の公比であればその数式は $a_n = \left(\frac{3}{4}\right)^n$ で表わされる。公比というのは等比級数で各項とそのすぐ前との比をいう。最初の数に四分の三を掛ける、それにさらに四分の三を掛ける。さらに四分の三を掛ける…という風にして並べられていくことになる。

「くも」(雲)の動詞が「くもる」(曇る)であるように、「いき」(息)の動詞が「いきる」(生きる)である。

日本語の「生きる」は息をする、ということから来ている。呼吸は私達が生きていることを実感する根拠であり、しかもそれは心臓の鼓動などと違って、ある程度意識し調整できる。病気のため、自然に呼吸が浅くなり、息が短くなることは不安をかきたてる。だから意識して息を深く吸い込もうとする。息を深く吸い肺に満たすことは、エネルギーの供給とも言える。病床の賢治は自分の息がだんだん短くなり、窒息するような息苦しさを覚え、思わず意識して息を深く吸う。ところがその呼吸は、またもや次第に短くなる。呼吸の短くなっていく過程は、数学的な規則正しさで、等比級数をなしていると気づく。苦しい息苦しさのさ中で、死にゆく己れの呼吸をまるで他人事のように観察したわむれる。「宮澤賢治語彙辞典」では、この詩について「病床にありながらおのれを対象化して、不安や絶望もユーモアにしてしまう恐ろしいばかりの詩魂のパワーが見られる」と解説しているが、死にゆく肉体、そこから生じる恐怖や不安、それを見つめる冷静な詩人―表現者がいて、その詩人は他人事のように己れの肉体と心を眺めているのである。

後半の「睡たい、睡たい、睡たい」と文字を下げ、いつの間には眠りの世界に入っていく様子を視覚的に表現する技巧も心にくいばかりの落着き、余裕である。息が止まるのと同じように、眠ることも死に近い。凍死のように眠りのうちに死んでいく死に方もある。この詩の場合も、眠くなって、眠りそうな自分をそのまま眠ってはならぬ―死んではならぬと眼を大きく見開いて、生を呼び戻そうとする。息を深く吸い込んで生を取り戻そうとするのと同じように、「眼を」の同じく三度にわたる繰り返し、しかも感嘆符を一つ、二つ、三つと重ねて眠り〓死から立ち上がろうとする意志の力の高まりを表わす技巧の冴え。再び息を大きくする。ところが又等比級数。「こいつはだめだ」―何というユーモアであろう。投げ出すしかない我が命。やけになって反動的に睡れ、睡ってしまえ、ひとおもいに死ね、と己れに叫ぶ。そのすぐ後に、いやいやならぬ死ぬ時でない、発奮し眼をかつと見開いて、息

を吸うのだ：死に向う肉体と、それに従おうとする意識、それを克服しようとする意識が葛藤する。肉体と心の、生と死のリアルなドラマ。ところが外はいつもの日常。母や台所で水仕事。その音が聞こえるだけ、この対照も見事というしかない。

こうした肉体のリアリズムに基づく詩に対して、たとえば次のような詩はその対極にある幻想詩とも言える。

〔丁 丁 丁 丁 丁〕

丁 丁 丁 丁 丁

丁 丁 丁 丁 丁

叩きつけられてゐる 丁

叩けつけれられてゐる 丁

藻でまっくらな 丁 丁 丁 丁

塩の海 丁 丁 丁 丁 丁

熱 丁 丁 丁 丁 丁

熱 熱 丁 丁 丁

(尊 々 殺 々 殺

殺 々 尊 々 々

尊 々 殺 々 殺

殺 々 尊 々 尊)

ゲニイめたうとう本音を出した

やってみる　　丁　丁　丁
きさまなんかにまけるかよ

何か巨きな鳥の影

ふう　　丁　丁　丁

海は青じろく明け　　丁

もうもうあがる蒸気のなかに

香ばしく息づいて泛ぶ

巨きな花の蕾がある

へ語注へ○丁丁丁丁丁―漢音で「テイ」「トウ」。物を続けて打つ丁丁や刀などで（転じて対話などで）やりあう丁丁発止の語は慣用でチョウチョウと読む。（この詩も「チョウ」と読むのがいいと思う）この詩の丁と文字（全部で三十五ある）は、鉛筆できれいに書かれた詩に後で埋め込むように別の筆記用具で力を込めて記入されたもの。従って詩としては丁をすべて省いた最初の形が完成しており、それに三十五文字をあらたに加えて成ったものと考えられる。○ゲニ―悪魔。仏教でいう悪魔とは仏道を妨げる悪霊を意味するが、回教神話にもとづく *genie* をドイツ風に読んだものとも考えられる。○巨きな花の蕾―詩「三原第一部」（一九二八・六・一三）の最後のフレーズにも次のようにある。「…南の海の　南の海のはげしい熱気とけむりのなかから　ひらかぬままにさえざえ芳り　つひにひらかず水にこぼれる　巨きな花の蕾がある…」。賢治は一九二八（昭和三）年六月七日から二十四日にかけて、水産物調査、浮世絵展観覧にあわせて伊豆の大島行きの目的をもって仙台、水戸、東京を経て大島に至る。十二日から十四日にかけて、大島農学校の開校をしていた伊藤七雄、チエ兄妹を訪ねた。その時、賢治は知らなか

ったがチエの方では見合いの意味もあった。「南の海」というのは伊豆諸島を囲む海で、おそらく夜明け前のまっ暗な海が次第に明るくなっていく情景を「巨きな花の蕾」に託して表現したのかもしれない。

一、二年前に行った伊豆の海が、病苦の中にあつてあらたによみがえってくる。藻でまっ暗な修羅の海に叩きつけられている自分。それは高熱に喘ぎ、苦しむ所から生れた幻想であろう。海の潮鳴、波の音は悪魔の叫びのように聞こえてくる。「尊」と「殺」の二文字のつらなりからなる呪文、それは至高なるもの、釈尊を、仏を殺そうとする呪いとなって押し寄せてくる。隠れていた悪魔は、その声と共に姿を現わす。その悪魔と戦おうとするや、悪魔は巨大な怪鳥となって飛び上がる。始祖鳥や恐竜のイメージを含む、その悪魔の鳥は一瞬にして現われたかと思うと消える。悪魔は去り、戦いは終わったのである。安堵のため息。やがて苦しみの夜も明け、芳しい香りの中に巨きな花の蕾が浮かぶ。闇の恐怖、地獄の恐怖は去り、甘美で浄らかな安らぎに包まれる。

後からはめ込まれた「丁」は、おそらく短く激しい呼吸に音を与えたものであり、「尊々殺々殺」は心音から生れたイメージでもあろうか。賢治は幻想・幻聴を豊かに経験したが、この詩は呼吸や心音などの病苦の生理から生れたファンタジーであろう。

「雨ニモ負ケズ」手帳に、法華経の一節を写し、呼吸を整えながら朗唱することによって悪しき妄想、幻聴去る、ということを書いた箇所がある。「ひのきとひなげし」の初期形を見ると、般若心経の「波羅羯諦」という言葉が呪文となって悪魔を退散させるということが書かれている。賢治は病気の苦しみを即物的に肉体のレベルにおいて捉えると同時に、一方で霊界、幻想の宗教的世界の中で、悪魔と仏の戦い、地獄と浄土を見ていたのではなからうか。

〔胸はいま〕

胸はいまかなしい鹹湖であって

岸はじつに二百里の

まっ黒な鱗木類の林がつづく

そしていったいわたくしは

爬虫かどれか鳥の形にかはるまで

じつとうごかず

寝てゐなければならぬのか

〈語注〉

○鱗木Ⅱうるこ木。古生代後期、特に石灰紀に大森林を形成した化石シダ植物。高さ数十mの高木で樹

幹にはウロコ状の模様がついていた。同様に、古生代石灰紀に繁茂したトクサ類の化石したものが「魯木」で、「鱗木」「魯木」はともに恐竜の跋扈する世界を現わし、賢治にとって、修羅意識をイメージ化したものとも言える。

○鹹湖―鹹は塩からい。塩水（鹹水）の湖。この詩の場合、岸には二百里の林が続くというのだから湖というより海である。

この詩の「かなしい鹹湖」のイメージを理解するには「堅い瓔珞はまっすぐに下に垂れます」という詩（「春と修羅」補遺）が参考になる。この詩は瓔珞を身につけた天人が悲しみの叫びをあげて苦い湖（Ⅱ恐ろしい海）に墮落するという幻想をモチーフにしたもので、溺れながら苦い水を呑みほそうと必死になっている愚かな、あわれな人達を賢治は確かに見たとして、（そして誰もが見るのだとして）深い悲しみをもって語っている。つまり「かなしい鹹湖」とは、天上から（あるいは人間界から）墮落した人々の落ちゆく地獄界である。十界曼荼羅によればそ

の地獄界の上に餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天上界と続くという。以上のことから考えて、賢治は病いに苦しむ自分を地獄の鹹湖にあるものと見、そこから立ち上がることを、爬虫のような畜生、あるいは天上界に向かう鳥となることとして表現したのであろうか。

「丁丁丁」や、この「胸はいま」のような詩を読むと、病いが幻想や象徴によって、内的な意味を与えられる、豊かな詩の世界を形作っていることが知られる。

五、菩薩

賢治は病床にあつて自らの信仰心を一層深めていった。「病中」詩篇のあるものは宗教詩である。賢治の信仰心の核になっているのは菩薩への思いである。

「菩薩」という言葉は梵語の *bodhisattava* を音写した菩提薩多（ぼだいさつた）を略した言葉で、悟りを求めて修行する者を意味する。元来は成道以前の釈尊（ゴータマ・シッダルタ・釈迦牟尼仏）の呼称として用いられた言葉であるが、大乘仏教が盛んになるにつれて、大乘の修行者すべてを指すようになった。仏陀は *Buddha* の音写で、悟った人という意味、その和名が仏―ほとけ―である。従つて、菩薩とは仏陀・仏という完成された存在になるべく修行する者である。

賢治の菩薩への信仰はおそらく中学時代から、というより信仰心の厚い家に育ち、幼少年時代から賢治の心の中に深く根を下ろしていたものだった。そしてそれは短歌や童話、詩など文学作品としてもごく自然に登場することになったのである。幾つかの例をあげてみる。

○雪降れば／今さみだれしくろひのき／菩薩のさまに枝垂れて立つ（雪が降ると今朝は乱れていた黒ひのきも菩薩の様な姿で静かに枝を垂れて立っている）（四三四）

○わるひのき／まひるみだれしわるひのき／雪をかぶれば／菩薩すかたに（悪いひのき、心乱れている悪いひのきよ、お前も雪をかぶって菩薩のように立っている）（四三五）

○はて知らぬ世界にけしのたねほども菩薩身をすてたまはざるなし（この永遠、無窮の世界の果てまで、菩薩は完全己れを犠牲として献げつくしその愛の及ばぬ所とてない）（四四二）

これらの短歌はいずれも大正六年一月（二十一才）に作られたものであるが、一つは雪をかぶって垂れている黒いひのきの姿から菩薩の姿を思い浮かべていること、又、菩薩を自分の身をことごとく捨てて、人々を導いた尊い存在として捉えていることがわかる。前者は素朴ながら菩薩のイメージ形成につながるものであり、後者は賢治の宗教的な倫理観、その生き方にもつながるものである。

「疾中」詩の中から「菩薩」を詠んだ詩をとりあげて考察してみたい。今、一応「詩」という言葉を使ってみたが、菩薩をテーマとする詩は、詩というより「偈」というべきものである。偈というのは、韻文の形で仏徳を賛美したり、教義を述べたりするもので仏典の中に多く見られる一つのスタイル（文体）である。キリスト教で言えば旧約聖書の「詩編」や「知恵の書」などがこれに近く、八木重吉の詩のあるものは、キリスト教の宗教詩である。

近代の詩人でこうした宗教詩を書いた人はきわめて少なく、賢治が病中にあつてこうした宗教詩を作ったというのは、その死生観の根底に、伝統的な仏教の信仰が生き続けていることを示すものでもある。有名な「雨ニモ負ケズ」の詩も、こうした偈の延長線上にあるものであり、仏教語や難しい言葉を使わず、日常の平易な言葉で、その宗教的理想を述べたものとみることができる。

熱またあり

水銀は青くひかりて

今宵また熱は高めり

散乱の諸心をあつめ

そのかみの菩薩をおもひ

息しづにうちやすらはん

たゆたへる光の澱や

野と町と官省のなか

ひとびとのおもかけや声

ありとあるしじまとうごき

なべてよりいざ立ちかへり

散乱のわが心相よ

あつまりてしづにやすらへ

あしたこそ燃ゆべきものを

へ語注〇散乱—一般用語としては文字通り散らばり乱れるということだが、仏教用語として賢治の愛用した言葉。唯識派における随煩惱の一つで、凡夫の心がその対象である物に流されて一刹那もとどまらないこと、心が乱れることである。「法華教」には「散乱心」という言葉が出ており、放心、狂乱の意である。賢治はこれを科学用語と

して光やX線などが多くの分子（モノド）、原子や微粒子などに当って方向を変えて散らばるという意味でも使っている。光が四方八方に散り乱れてきらめくイメージの中にこうした仏教と科学の両者の意味を込めて使っていることもある。詩「岩手山」には「その散乱反射の中に」とあり、「雨ニモ負ケズ手帳」には「警 散乱心」（散乱心を警める）という言葉も出ている。○澱―よどみ、よど、おり、などと読むが、この場合「おり」と読むのが自然であろう。「青森挽歌」では「それはビーアの澱おり」と賢治自身ルビをふっている。一般には、澱は液体中に混入している微細固体などが下方に沈澱したまっただものであるが、どんよりと濁ったものや、水などが滞って流れず、よどむことをいう時もある。賢治の場合、重苦しい都会の光や大気、山麓を覆う雲の形容に用いられるなど、きわめて特色のある使い方がなされている。たとえば「澱った光の澱の底」「澱った」は「たまった」と読む。下の「澱」は「おり」とか、「それにうしろも三合目まで／ただまっ白な雲の澱みにかばってゐます」（詩「林学生」）とあるのでわかるように、光や雲も賢治にとって沈澱するものなのである。○しじま―静寂。○官省―官庁。こはその建物であろう。

（口語訳）水銀は青く光り、今宵再び熱は高くなった。わが乱れ散るもろもろの心一つに集中し、その昔の菩薩をひたすら念じ、息静かに休もうと思う。

ゆらめく光の澱、野と町や官庁の建物などの中に、又人々の面影や声、あらゆる静けさと動き、それらのすべてから、さあ立ち返って乱れ散る我が心よ、一つに思いを集中し、安らうがいい。明日こそ再び燃えて立つのだから。

詩の前半と後半はほぼ同じ内容の反復で、最後の「あしたこそ燃ゆべきものを」に集中していく。前半で賢治は自分の病状を述べ、高熱の中にあつて自分の散乱心を菩薩への思いというただ一点に集めようと自らに呼びかける。

後半では、自然や町、家、人々の雑踏、又静けさなど、そうした目に見える現実の一切から立ち返って―なぜならそれらは散乱心の元凶でもあるからである―菩薩への思い、「観想」によって心の安らぎ、平安を得ようとする。その安らぎ、平安のうちに力を蓄えて明日こそは立ち上がろうというのである。

一言で言えばこの詩は散乱心を警めて、体も心も力に満ち、健康になって再起を果たしたいという祈りの詩である。それにしても、「菩薩をおもふ」とは具体的には一体どう思うのか。それを示すのが次の詩である。

〔そのうす青き玻璃の器に〕

そのうす青き玻璃の器に

しづにひかりて澱めるは

まことや菩薩わがために

血もてつぐなひあがなひし

水とよばるるそれにこそ

〔語注〕○玻璃―硝子。古くはビードロ（ポルトガル語）あるいは玻璃（中国語）を用いた。賢治は光るものや透明なものに好んでガラスを用いている。ここではおそらく枕もとに置かれたガラスのコップを「玻璃の器」といったものである。

（口語訳）そのうす青いガラスのコップの底に、静かに光って沈んでいるものは、ああ、これこそ誠に、菩薩が私のために血をもってつぐない、あがなってくれた水と呼ばれる、それなのだ。（それを思えば、どうして感謝の涙を流さずにおられようか）

賢治は枕辺にあったコップの水を見て、その水は、菩薩が他ならぬこの自分のために流した血だと感じとつてい
る。菩薩の血は、丁度、キリストの血が人々の罪を担う愛の証ともなったように、人々に対する慈悲の現われであ
る。それを思えば菩薩の慈悲心に感謝し、それに報いるべく、自分自身も菩薩となって人々の救いのために命を犠
牲にしなくてはならないというのである。賢治の博愛的な信仰生活の根底には、こうした報恩の觀念が生き生きと
脈うっていたと思われる。

ここで「疾中」詩篇の考察から幾分それるが、賢治の信仰について、「報恩」という点から少し考えてみたい。
次の書簡は、ふだんほとんど誰にも知られることのなかった賢治の心の秘密を明かしている。

「けれども保阪さんのする様に一切の生あるもの生なきものの始終を審に諦かに観察したら何が涙でないものがあ
りませうや。ああなみだよ、なみだよ。めめしくはなくな。おまへの恋人が奪はれ、おまえの名誉が無茶無茶にふ
みにぢられても男はなくな。おらは泣かない。おらは悲しい一切の生あるものが只今でもその循環小数の輪廻をた
ち切つて輝く空に飛び立つその道の開かれたこと、そのみちを開いた人の為には泣いたとて尽きない。身を粉にし
ても何でもない。この人はむかしは私共とおなじ力のないかなしい生物であった。かなしい生物を自ら感じてゐた。
ああこの人はとうとうはてなき空間のただけしの種子ほどのすきまをもとこさずにその身をもって供養した。大聖
大慈大悲心。思へば泪もとどまらず、大慈大悲大恩徳いつの劫にか報すべき。ねがはくはこの功徳をあまねく一切
に及ぼして十界百界もろともに同じく仏道成就せん 一人成仏すれば三千大千世界山川草木魚禽獸みなどにも成
仏だ」

大正七年五月十九日親友保阪嘉内に宛てたこの書簡は、賢治の信仰を考える上で、きわめて重要である。なぜな
らこの書簡において、賢治は自らの燃えるような信仰の歓喜を語り、「唯一の实在」のために生きること「私はも

し金はもうけてもうまいものは食はない。立派な家にすまない、妻をめとらない」(同じ書簡中の言葉)と、通常の幸せを否定し、自己犠牲的な生き方をする決意を述べているからである。自己犠牲といえ、ただ辛いだけのものと考えられやすいが、賢治のいう自己犠牲には大きな歓喜が伴っていた。輪廻の輪を断ちきって「その道を開いた」——永遠の至福に至る道を開いた釈迦が、我が身を一切捧げつくした事、その釈迦の大慈大悲心を思えば、どうしてそのことに深い感激・感謝を覚えずにいられよう。その釈迦の大恩を意識すればするほど、わが身を投げだしてその恩に報いなくてはならない。その恩に報いることが自己犠牲なのである。

この書簡の中で注意すべきは「供養」という言葉であろう。一般には、この言葉は「三宝(仏・法・僧)又は死者の靈に諸物を供え、回向すること」(広辞苑)をいうが、賢治はこれを釈迦があらゆる生きもののために自分の命を捧げたという行為を指すのに使っている。

キリスト教の場合、イエスが人々の罪に代って己が命を神に捧げたと説かれるが、賢治の法華経信仰はキリスト教にも近かった。他の書簡には「この前にも申し上げ候通り私一人は一天四海の帰する所妙法蓮華経の御前に御供養下さるべく然らば供養する人も供養の物も等しく光を放ちてそれ自らの最大幸福と一切群生の福祉とを齎(もたら)すべく候」(大正七年二月十日父政次郎宛)と記し、自分を法華経に供養し、献げることによって、供養する人も、供養される自分も、光となって人々に幸福をもたらすのだという。

賢治はもともと愛情の深い両親に育てられ、恵まれた豊かな生活の中で、両親の恩を強く感じて生きていた。両親の自分に対する愛情にいかにして報いるか。これが、ある意味で賢治の一生の課題であった。そして、賢治からすれば、両親の愛に報いる最大の行いが、法華経の心を人々に伝えることだった。大正七年二月二日付の父政次郎宛書簡に次のようにいう。

「毎度申し上げ候如く、実は小生は今後二十年位父上の曾つての御勧めにより静に自分の心をも修習し經典をも広く拝読致し幾分なりとも皆人の又自分の幸福となる様、殊に父上母上又祖父様乃至は皆々様の御恩をも報じたしと考へ自らの及びもつかぬ事ながら誠に只今の如何なる時なるか吾等の真実の帰趣の何れなるやをも皆々様と共に知り得る様 致したくと存じ只今の努力はみな之に基き候処、就ては帰盛後常に思ひ居り候（中略）さて然らば如何にしてこの御恩の幾分をも報じ申さんやを真面目に考へたる事全く無之とはよもや御疑無之事と存じ候、誠に仮に世間にて親孝行と云ふ如く働きて立派なる家をも建て賢き子孫をも遺し何一つ不自由なき様に致し候ともこの世に果して斯る満足は有之べく候や 報恩には直ちに出家して自らの出離の道をも明らめ恩を受けたる人々をも導き奉る事最大一なりとは就れの宗とて教へられるなき事に御座候（中略）願はくば誠に私の信ずる所正しきか否や皆々様にて御判断下され得る様致したく先づは自ら勉励して法華經の心をも悟り奉り働きて自らの衣食もつくのはしめ進みては人々にも教へ又給若し財を得て支那印度にもこの經を広め奉るならば誠に誠に父上母上を初め天子様、皆々様の御恩をも報じ折角御迷惑をかけたる幾分の償をも致すことと存じ候依て先づ暫らく名をも知らぬ炭焼きか獵師の中に働きながら静かに勉強致したく若し願正しければ更に東京なり更に遠くなりへも勉強しに参り得、或は更に国土を明るき世界とし印度に御經を送り奉ることも出来得べくと存じ候」

仏教では、父母の恩、国王の恩、衆生の恩、三宝の恩を「四恩」として、その恩を自覚することが大切だと説かれてゐる。父母の恩を心に感じ、両親に恩返しをしたい、ということとは、多くの人の持つごく自然な感情である。だが父母への恩は時として自分の肉親だけへの狭い愛となることもある。国家の恩を思うこともそれ自体としてはある程度わかることだが、それが時として、他の国はどうでもいいという、偏狭な愛国心につながることもある。仏教は人としてごく自然に誰しも持っている自然な愛情が、このように利己主義につながることを自覚していた。

この立場からして、恩を感じることを「恩愛」として断ち切ることも説いている。親子や夫婦の愛は、仏道修行の妨げになるものとしてこれを否定したのもそのためである。ただ、わが親だけ、かかわりのある人だけを考えるのではなく、一切衆生の救いを考える、ここに人類的な宗教が誕生する。「親鸞は父母の孝養の為に」として、一返にても念仏申したること、未ださふらはず。その故は、一切の有生は皆もて世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれもこの順次生に（＝現在の生が終つてから、その次に生まれ変わる生）、仏になりて助けさふらふべきなり」（「歎異抄」という言葉は、父母の恩愛を乗り越えて仏の慈悲に生きようとすることであり、賢治の信仰には親鸞的な人類兄弟思想があるとも言えはしまいか。

名聲

なべてのまこといつはりを

ただそのままにしろしめす

正徧知をぞ恐るべく

人に知らるることな求めそ

また名を得んに十方の

諸仏のくにに充ちみてる

天と菩薩をおもふべく

黒き活字をうちねがはざれ

〈語注〉 ○しろしめす―知っていらっしやる。○正徧知―仏の十号の一つで、正しい悟りを開いた仏・如来のこ

と。「これその演説中数多如来正偏知に対してあるべからざる言辞を弄したるによって明らかである」(童話「ビヂテリアン大祭」とある。保阪嘉内宛書簡に「全知の正偏知」(大正九年十二月上旬)という言葉もみえる。

(口語訳) すべて of 誠と偽りを、ただそのままに知っていらっしやる、正偏知を恐れなくてはならない。人に知られることなど決して求めてはならない。又、もし名声を得るとしても十方の諸国の国にみちみちている。天と菩薩を思うべきであり、黒い活字を願ってはならない。

この詩には次のような先駆形がある。

名声

いまもし名を求めなば

諸仏の邦にみちみてる

菩薩と天に知られんと

ひねもすこそもねがふべき

ただひとときの好みもて

よしあしなどを云はれなん

黒き文字とはなるなかれ

もし知られんとねがひなば

なべてのまこといつはりを

ただそのままにしろしめす

正偏知にぞ知られなん

さあらぬ人をうち求めざれ

(口語訳) 今もし名を求めるとしたなら諸仏の国に充満する菩薩と天に知られようと終日願うべきなのだ。ただ人の世の一時の好みで、良し悪しをいわれる黒い文字―人の世の名声を得ることなどあってはならない。もし自分を知られようと願うなら、真実をありのままに知っていらっしやる正徧知(仏)にこそ評価されたいものだ。人の評価という不完全なものを求め、より所としてはならない。

この詩で「正徧知」は神のごとき全知の存在として捉えられている。賢治の名声は今や日本中に響きわたって、世界的な文学者として知られつつあるが、その生前、無名に近い存在だった。とは言え、身近には賢治を尊敬し礼讃する人が常にいた。しかし賢治はそうした人々の評価にきわめて用心深かった。それに決して溺れ、慢心し、うぬぼれることを自らいましめた。慢心やうぬぼれほど賢治が忌み嫌い、又警戒したものはなかった。それは全知なる正徧知を意識し、その正徧知の目で自分を見ようとしたからである。賢治の良心の鋭さ、内面を見つめる目の深さは、こうした絶対者を常に忘れまいとするところから生れたものだった。

〔熱とあへぎをうつつなみ〕

熱とあへぎをうつつなみ

死しにのさかひをまどろみし

このよもすがらひねもすを

さこそはまもり給ひしか

瓔珞ようらくもなく沓くつもなく

ただ灰いろのあらぬのに
庶民がさまをなしまして
みこころしづに居りたまふ

み名を知らんにおそれあり
さは云へまことかの文に
三たびぞ記し置かれける
おんめがみとぞ思はるゝ

さればなやみと熱ゆゑに
みだれごころのさなかにも
み神のみ名によらずして
法の名にこそきましけれ

瓔珞もなく沓もなく
はてなき業の児らゆゑに
みまゆに雲のうれひして

さこそはしづに居りたまふ

〈語注〉○熱とあへぎをうつつなみ―理解しがたい。「うつつ」を現実、の意と考え、「山を高み」（山が高いので）と同様の表現と考え、熱や喘ぎのために現実とも思われなく、の意と解してみた。○瓔珞―瓔も珞も首飾りの義。宝石や貴金属を糸でつないで菩薩や夫人の首飾りとしたもの。賢治の作品の中では菩薩が身につけている様を「立派な瓔珞をかけ黄金の円光を冠り」（童話「ひかりの素足」とか「お星さまをちりばめたような立派な瓔珞をかけてみました」（童話「二十六夜」などと表現している。又天人が瓔珞を身につけている様を描いている作品もある。○かの文―不明。その人（おそらく菩薩）のことを女神として三度記してあるという。その本（おそらく経典）は何を指すか。○沓―皮製のはきものを指す時この文字を使う。沓をはいているのも菩薩の姿。

（口語訳）熱と喘ぎのために現ともなくなつて、生死の間をさまよいつつまどろんでいた、この夜ひと夜、ずっと一日中私をこうして守って下さったのか。（そのために自分はこうして生きているのか）瓔珞も沓も身にまとわず、ただ灰色のそまつな荒布を身に、ごく普通の庶民のようないでたちで御心、静かに座っていらつしやる。その御名を知るのも畏れ多いことだ。とは言え、誠にあの経典に三度記し置かれた女神ではないかと思われる。だから悩みと熱のため心乱れるさ中であつて、神の名によるのではなく、法の名をもってやってこられたのだ。瓔珞もなく沓もない（そまつな出で立ちで）はてなき業に生きる私達のために、その眉に雲のように憂いを見せて、そうして静かにそこに座っていらつしやるのだ。

この詩のどこにも「菩薩」という言葉は出ていないが、賢治の胸に浮かんだ菩薩のイメージを述べ、その菩薩への感謝を述べたものと思われる。十八才で、岩手病院に入院した折「まっ白なひげをはやし、岩手サン（岩手山の

山神)がお出になつた」夢をみて、熱が下がつたと語っているが、夢や幻想としてこの菩薩のような姿が浮かび出たのかもしれない。この詩から考えると、菩薩は次の四つの特徴をもつ。

①病気に苦しむ自分をずっと守って下さる。

②庶民と同じそまつな着物を身にまとつて静かに座っていらつしやる。

③その名を知ることさえ恐れ多く(だから「菩薩」という言葉さえ使っていないのだろう)「女神として」その本には記されているという。従つて女神とも呼べる存在である。

④女神というより、法―南無妙法蓮華経のその法をいだいて現われる。菩薩は南無妙法蓮華経という法を体現した存在である。

⑤罪業深い私達のため、愁いを抱きながら座つていらしやる。

以上のように、この詩も仏教信仰に基づく詩―偈であり、賢治の生き生きした信仰心が菩薩のイメージを観想することを通して表現されている。

この詩を理解する手がかりとして、次の「野の師父」を上げておきたい。

野の師父

倒れた稲や萱穂の間

白びかりする水をわたつて

この雷と雲とのなかに

師父よあなたを訪ねて来れば

あなたは縁に正しく座して

空と原とのけはひをきいてゐられます

日日に日の出と日の入に

小山のやうに草を刈り

冬も手織の麻を着て

七十年が過ぎ去れば

あなたのせなは松より円く

あなたの指はかじかまり

あなたの額は雨や日や

あらゆる辛苦の図式を刻み

あなたの瞳は洞よりうつろ

この野とそらのあらゆる相は

あなたのなかに複本をもち

それらの変化の方向や

その作物への影響は

たとへば風のことばのやうに

あなたののどにつぶやかれます

しかもあなたのおももちの

今日は何たる明るさでせう

豊かな稔りを願へるままに

二千の施肥の設計を終へ

その稲いまやみな穂を抽いて

花をも開くこの日ごろ

四日つづいた烈しい雨と

今朝からのこの雷雨のために

あちこち倒れもしましたが

なほもし明日或は明後

日をさへ見ればみな起きあがり

恐らく所期の結果も得ます

さうでなければ村々は

今年も暗い冬を再び迎へるのです

この雷と雨との音に

物を云ふことの甲斐なさに

わたくしは黙して立つばかり

松や楊の林には

幾すぢ雲の尾がなびき

幾層のつつみの水は

灰いろをしてあふれてゐます

しかもあなたのおもちの

その不安ない明るさは

一昨年の夏ひでりのそらを

見上げたあなたのけはひもなく

わたしはいま自信に満ちて

ふたたび村をめぐらうとします

わたくしが去らうとして

一瞬あなたの額の上に

不定な雲がうかび出て

ふたたび明るく晴れるのは

それが何かを推せんとして

恐らく百の種類を数へ

思ひを尽してつひに知り得ぬものではありませんが

師父よもしもやそのことが

口耳の学をわづかに修め

鳥のごとくに軽佻な

わたくしに関することでもありますならば

師父よあなたの目力をつくし

あなたの聴力のかぎりをもって

わたくしのまなこを正視し

わたくしの呼吸をお聞き下さい

古い白麻の洋服を着て

やぶけた絹張の洋傘はもちながら

尚わたくしは

諸仏菩薩の護念によって

あなたが朝ごと誦せられる

かの法華経の寿量の品を

命をもって守らうとするものであります

それでは師父よ

何たる天鼓の轟きでせう

何たる光の浄化でせう

わたくしは黙して

あなたに別の礼をばします

農民活動を展開していた時のこの詩は、その農民活動が「野の師父」との対話、野の師父を観想することによつ

てなされたものだということを証明している。七十を過ぎ、筋骨にも皮膚にも「辛苦の図式」を刻んだ師父は、法華經の信仰に生きる菩薩なのである。この詩において、賢治は菩薩の前に立つ時、自分の心が浄われ清められることを感じ、高らかに法華經に生きることを宣言している。菩薩はこのように健康な時、病床にある時、姿を変えて様々なイメージで登場する。そして、賢治の生涯を支えると同時に、詩や童話を生む、一つの源泉ともなっているのである。

六、南無妙法蓮華經

菩薩の姿を觀想することは賢治にとって自らが、それに近づこうと努力するということであった。病いや死の意識の中で賢治は益々、法の体現者としての自分の使命を強く自覚する。それは自らを法華經に捧げたい、絶対真理の前に病軀を供養せんとする熱い思いである。

手は熱く足はなゆれど

われはこれ塔建つるもの

滑り来し時間の軸の

をちこちに美ゆくも成りて

燦々と暗をてらせる

その塔のすがたかしこし

〔語注〕○美ゆく―「はゆく」と読むのであろう。普通は「映ゆく」と書き、まばゆい、照りかがやくの意。この詩の前に置かれた「疾いま革まり来て」には「われよりも美しけきひとのすこやかにうちも得ななん」という詩句がある。「はし」は普通「愛し」と書き、愛らしいの意であるが、これも「はゆし（映ゆし）」の意で使っているようである。○塔―「法華経如来神力品第二十一」に次の一節がある。「所在の国土に、若は受持、読誦、解説、書写して、説の如く修行すること有らば、若は経卷所住の処、若くは園中に於手も、若は林中に於ても、若は樹下に於ても、若は僧房に於ても若は百衣の舎にても、若は殿堂に在りても、若くは山谷、曠野にても、是の中に、皆まさに塔を起て、供養すべし。所以はいかん」これに続く言葉が「当に知るべし、是の処は即ち是道場なり」という、いわゆる道場観といわれるもので、賢治は雨ニモ負ケズ手帳などにも、この言葉を記しているからその直前にある。法華経を収める塔を建て、これを供養しなくてはならない、というこの如来神力品から取ったことは明らかである。法華経は一切の根本原理であるから、これを受持、読誦：し、あがめたてまつって収めることが大切であり塔はその法華経を収める建物である。塔は元來、舍利（聖者の遺骨）を収める建物であり、聖者を供養するものである。書簡に「私一人は一天四海の帰する所妙法蓮華経の御前に御供養下さるべく然らば供養する人も供養の物も等しく光を放ちてそれ自らの最大幸福と一切群生の福祉とを齎すべく候」（大正七年三月十日 父政次郎宛）とあり、聖者を供養する塔を建てることは同時に自分を法華経に供養することで、それによつて法華経を輝かしめ、己れを輝かしめ人々を救い幸福に導く光になるという。

（口語訳）（熱のため）手は熱く、足は萎えているが（立つこともできないが）私は塔を建てる者である。滑るよりに流れゆく時間軸のそちこちにまばゆくなつてさんさんと闇を照らしている、その塔の姿を仰げば畏れ多いこと

である。

この詩に続く次の詩も、自分を法華経に捧げたいという思いを述べたものである。

ああ今日はここに果てんとや

燃ゆるねがいひはありながら

外のわざにのみまぎらひて

十年はつひに過ぎにけり

懺悔の汗に身をば燃し

もだえの血をば吐きながら

ただねがふらく蝕みし

この身捧げん壇あれと

〔語注〕○ねがひ―この詩の場合、賢治が共に誓ったではないかという保阪嘉内宛書簡で繰り返している「願はくは此の功德を普く一切に及ぼし我等と衆生を皆共に仏道を成ぜん」という四弘誓願を指していると思われる。○十年―賢治が仏恩に覚醒してから十年ということだと思われる。○壇―密教において修法の時、仏像、三昧耶形（仏・菩薩がその本誓を表示する所示物。弓、箭、器、杖、印契など）などを安置し、供物、供具などを備える壇（土を盛って高くした祭壇）。つまり供養するものを捧げる壇であり、供養するものは、この詩ではわが身である。

（口語訳）ああ今日ここに果てようとするのか。（ふり返れば）燃えるような願い（仏の恩愛に応えるべく、全て

の人々に仏の道を伝えようという誓い)を持ちながら、外のことのみまぎれ十年が空しく過ぎてしまった。

今それを悔い、過ちの多かった身を懺悔する苦しみを汗として、身を燃やし、悶えの血を吐きながら、ただ願うのはむしばまれたこの肉体を捧げる祭壇があれということである。

以上二篇の詩は、賢治の宗教的使命感の表明である。賢治が自らの生の課題としてこうした考えを強く持つに至った背景には、よくわからないが、何か、一種の内的覚醒があつたものと思われる。その書簡をみると一九一八(大正七)年において、こうした信念、使命感が確立している。童話を書く、農学校の教師や農民活動などは、死を前にした今、「外のわざ」であつたのかもしれない。

病いに倒れ、死を目の前にした今、賢治は明確に死と対峙して、自己の生の課題を自ら確認している。法華經にこの病んだ肉体を捧げようという、そしてそのことによつて世の人々に法華經の心―仏恩を自覚させたい、というのである。ここにあるのは、一種の殉教的な精神といつてもよい。

なぜ法華經にこれ程まで固執するのか。賢治によれば、これこそ科学の法則を越えた絶対真実だからである。自分の死―無を前にして、賢治は幾度も幾度も問い返す。「自分とは何か」と。ぎりぎりにつきつめていった答えが、一種のドグマとなつて宣言されている次の詩。この詩(?)が最後に置かれてるのは、まさに「疾中」詩篇の結論―あるいは又賢治の生涯の究極的なメッセージであることを暗に示しているのではなからうか。

(一九二九年二月)

われやがて死なん

今日又は明日

あたらしくまたわれとは何かを考へる

われとは畢竟法則の外の何でもない

からだは骨や血や肉や

それらは結局さまざまな分子で

幾十種からの原子の結合

原子は結局真空の一体

外界もまたしかり

われわが身と外界とをしかく感じ

これらの物質諸種に働く

その法則をわれと云ふ

われ死して真空に帰するや

ふたたびわれと感ずるや

ともにそこにあるは一の法則のみ

その本原の法の名を妙法蓮華経と名づくといへり

そのことに人に菩薩の心あるを以て菩薩を信ず

菩薩を信ずる事を以て仏を信ず

諸仏無数億而も仏もまた法なり

諸仏の本原の法これ妙法蓮華経なり

歸命妙法蓮華經

生もこれ妙法の生

死もこれ妙法の死

今身より仏身に至るまでよく持ち奉る

〈語注〉○真空―全くの空虚というのではなく、仏教語として、アトマン（自己、行為主体としての自己）が全く存在しないことをいう。「有でない有」をいう「妙有」に対して、「空でない空」、「真実の空」をいう。「真空妙有」という言葉が示すように、真実の空は、妙なる現実を生成・展開せしめると仏教では考える。賢治の場合、「光や熱や電気の位置エネルギー（中略）畢竟どれも真空自身と云ふ」（詩「五輪峠」下書稿）という詩句からわかるように、これを自然科学とも結び付けて理解し、光や熱、電気などのエネルギーは「真空」の現われだと考えていた。○妙法蓮華經―略して「法華經」。仏教を代表する經典の一つ。「法華」とは最高の法、真理の意。鳩摩羅什の漢訳による八卷二十八品（品は章にあたる）前半の十四品を迹門、後半の十四品を本門として、迹門は仏陀の説いた教えの真実は何かを示し、本門は仏陀の生命は不滅であることを説く。表現は幻想的・視覚的・神話的で、壮大であり、その中に生きた釈迦の教えが満ち充ち、仏教文学史上の傑作といわれる。賢治は十八才の時に、島地大等編の「漢和対照妙法蓮華經」を読んで深く感動、この教えへの帰依は生涯変わらなかったことはこの詩によっても明らかである。○今身―「こんじん」。現在のこの身。○仏身―仏の肉身。仏の身体。釈尊は法（真理）を信ずる立場に立ち、自分は死んでなくなるが、法は不滅だから、自分のなき後、法に頼れと遺言した。しかし、弟子達は釈尊の人格を通して仏法を信じたので、釈尊の在當時からすでに釈尊の身を通常人を越えたものと見る傾向があった。その死後、釈迦の説いた法を不滅の身（法身）とみなし、釈尊の現実の身（生身）に対置させた。賢治

は「今身」を今のこの身、「仏身」を死後の身の意で使っていると思われる。○本原―一般には「本源」と書く。根本、根源の意。○帰命―梵語のナムサ namsa (礼拝の意) に当る言葉。身命をささげて仏陀、又は三宝に帰依することをいう。お題目の「南無妙法蓮華経」の「南無」はこのナムサの音訳で、法華経に帰依、帰命しますという誓宣の言葉である。賢治はこれを「手紙四」で「ナムサダルマプフンダリカサーストラ」と梵語表記している。○法―仏教語でダルマ dharma の漢訳。真理、真実、理法。科学の世界の法則に対し、それを越えた目に見えない真実、絶対の真実。保阪嘉内宛書簡の中では「絶対真理」といつている。

これは、死を前にした「信仰宣言」であり、自分のより所とし、帰依する絶対の真実、信仰のドグマの宣言である。その宣言は、死の危機を前にして高らかに宣言されている。一言で言えば、「南無妙法蓮華経」というより、提題（法華経の題目を唱えること）に尽きるのだが、それを科学の法則、仏教の法を結びつけて宣言した。

自己の存在は全ての土台であり、喜び、悲しみ、欲望し、希望し生きる根拠、より所である。死はその自己の崩壊である。自己は、死を前にして根本から揺すぶられる。自分とは何なのか、と。賢治に限らない。おそらく死を前にしたすべての人が問う問いであろう。間もなく消えようとする自分の肉体、その時、自分という意識はどうなるのか。肉体と共に意識も喪失し、一切は無に帰するのか。この詩の問いかけは実に重い。賢治は間もなく死ぬであろう自分を想像し、自分とは何だろうかと幾度も繰り返して自らに問う。ここで言う「われとは何か」を、その論理・信条をまとめると次のようになる。

①われとは、われを形成している肉体の構成要素であり、骨・血・肉：分子・原子などの物質諸種に働く、科学的な法則に支配されて存在しているものである。

②自分が死んで無に帰するのか、それとも自己を感じるのか、それはわからない。しかし生と死をつなぐ唯一の根源的な法があり、それは妙法蓮華経である。

③人間には本来菩薩の心（慈悲の心）があるから、菩薩（仏道の修行者）を信じ、そこから仏（覚者）を信じるようになる。そして、もろもろの仏の根本は妙法蓮華経であり、仏は法華経の法を体現した存在である。

④生も死も根源的法則である妙法蓮華経の中の現象であり、今も、そして死後の仏身においても、その信仰に生きるのだ。

①は科学的世界観であって、現代において常識となっている世界観である。自己を形している肉体でいえば、まず肉眼で見えるレベルでの骨や血や肉やで自分の体は作られている。顕微鏡レベルで言えば、それは分子や原子で構成されている。そうした各組織や分子・原子を組み立てる力が法則である。目に見える物質の世界、その物質は法則によって支配されている。生起も消滅もその法則に従った一つの現象である。「私」も他の一切の生物としての「物」と同じく「現象」に他ならない。その現象は、時に無秩序と見えるかもしれないが、科学が証明しているように、でたらめな無秩序なものではなく、そこに法則が貫徹している。賢治はここで科学の法則の下に置かれてある自分というものを意識する。これは感傷や一人よがりのナルシズムや、これ又一人よがりになり易い自分の人生観などといったものに立つのでなく、客観的な、全体的な視点に立って自己を把握するということである。これはあらゆる科学者にも共通する信念であろう。この信念がなければ科学の探求はありえない。

しかし、「春と修羅」序によれば、科学の法則は次々に破られ、乗り越えられ、新しい法則が発見される。まごう方なき真実だとされ、それなりの証拠・根拠もあげられていたはずの法則も、二千年も立つと別の法則が発見される。絶対の真実とされていたものはこうして次々に破られていく。だから自分達が今、このことは絶対に正しい

真実だと信じていたことも、実は仮のことにすぎず、ただ「そう感じている」にすぎない、と賢治はいう。感じるとは一般に芸術に対して使う言葉で、科学的な法則は感性に受け止められた理解とは違うというのが普通の理解である。しかし賢治は歴史も科学も、すべて「感じられたもの」だという。これは科学についての盲目的な信仰、科学の絶対視に対する批判につながる。別な言い方をすれば科学の相対化であり、人間の理性はどこまでいっても絶対の真理に到達できないということである。①から②には、理性から信仰（科学から宗教）への飛躍がある。

科学の相対化に代わって賢治は、確固不動の、絶対の真実、歴史の流れの中で決して変わることはない根源的な唯一、絶対の法として妙法蓮華経という法を宣言する。科学的法則は、五官で対象化できる実在の世界にしかあてはまらない。したがって①でいわれていることは、物質の世界に限られるのであって、生と死を貫く根源的な法則として賢治は②でいうように、根源的な、絶対真実の法として法華経を宣言する。しかしこれは、科学のように懷疑・理性・実証によって把握されるのではなく、心でそう信じるしかないものである。③は②の根拠を示している。法則から法、懷疑から信仰、非情な法則から、有情の慈悲へと認識が変化していくのは、人が菩薩の心（慈悲心）があるからである。

こうして賢治は出発点を人間の心に潜在する良心に置く。人は誰しも菩薩の心、慈悲心がある。菩提心あるゆえに人は菩薩を信じ、仏を信じる。人の心に潜む菩提心から、菩薩への信仰、そして諸仏への信仰、賛嘆、それは内なる心の深まりであり、信仰への確信である。そしてもろもろの仏の根源は、妙法蓮華経という法である。

賢治にとって妙法蓮華経は一つの思想とか精神などといったものではなく、非情な暗い科学の法則を乗り越える、この宇宙万物を包摂し、地史や歴史、そして宇宙の完成までを包む絶対真理なのである。妙法蓮華経のその法則は別な一語で言えば、宇宙意志ということになる。即ち、賢治は自然科学的な非情な世界観の根源に、目に見えない

永遠の宇宙的愛の働きがあると信ずるのである。宇宙は非情な、機械的な、物理的な法則に支配されているのでなく、有情の慈悲・愛の働く場であり、地史や人類の歴史もその愛の完成に向っている。そのことを意識し、大なる宇宙意識を持って生きる人こそ聖人と呼ばれる愛の証人―ジヨバンニである。

人間は自分のうちに愛の種子たる心をもっている。菩薩の行動に心打たれるのはそのためである。その菩薩は永遠の法の具現者であり、仏は即ち法身として、法そのものと一体になったものである。釈尊は自分はなくなくなるが法は不滅であるからこれによれと弟子達に教えた。しかし釈尊の死後、弟子達はその法を不滅の身(法身)とみなし、永遠不滅の真理そのものと考えた。法華経は、それを説いている。仏の永遠性、真理の永遠性は生も死も貫くから、この世とあの世をつなぐ一枚の切符となる。この切符をしっかりと握って、この世を生ききる―これが賢治の信仰宣言である。

私はこの詩にジヨバンニの持っていた「黒い唐草のやうな模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷した」切符を思い浮かべる。その切符は「ほんとうの天上へさえ行ける切符」であったというが、賢治にとって法華経はまさにそうした永遠の天国への切符であった。そして、賢治の最期の遺言「私の全生涯の仕事は、この経典をあなたのお手許にお届けしてその仏意に触れてあなたが無常道に入られんことをお願いするの外ありません」という言葉にもまっすぐつながってくる。賢治の生涯は、法華経という「天上への切符」があることを人々に示そうとした生涯であった。少なくとも賢治はそこに自ら使命があると信じ、その信念をもって生涯を生きただのである。

(注一)「十界曼蛇羅」とは、日蓮が佐渡流罪中に創案した、文字による曼蛇羅(多勢の仏や菩薩を教理に従って、模様のように書いた図で儀式の時に本堂に掛けて拝むもの)で、南無妙法蓮華経の光に照らされて、十界の一切衆生の仏性が目覚め

て成仏するという思想を表現したものの。十界とは①地獄界②餓鬼界③畜生界④(阿)修羅界⑤人間界⑥天上界⑦声聞界⑧縁
覺界⑨菩薩界⑩仏界の十の世界をいい、このうち①から⑥までが六凡と呼ばれる迷いの世界で、⑦から⑩までが四聖と呼
ばれる悟りの世界である。

(注二)「疾中」詩篇のうち、詩の題がつけられているものが八篇、つけられていないものが二十二篇ある。題がない、とはい
っても詩それ自体としては完成したものである。(これは「文語詩五十篇」同百篇においても同様)題のついていない詩
の冒頭の一行を「」に括て仮の題とするのが校本宮沢賢治全集のいき方で、本稿もそれにならった。従って「まなこを
ひらけば四月の風が」とあるのは詩の題がないことを示している。

(注三)佐藤隆房の「宮沢賢治」によると、この詩の作られた(懐血病で苦しんだ)のは一九三二(昭和七)年春のことだとい
う。そうすると「疾中の」[8.1928-1930]からはみ出してしまうことになる。詳しくは今後の課題として、本稿では、こ
の詩も一九二九(昭和四)年春の製作と仮定しておく。

〈参考文献〉

- 「宮澤賢治語彙辞典」
- 「佛教語辞典」 中村元
- 「宮沢賢治論集3」 小沢俊郎 有精堂
- 「宮沢賢治」 佐藤隆房 富山房(一九四二刊)
- 新版「宮沢賢治」佐藤隆房(一九九四年刊)
- 「孤高の詩人 宮沢賢治」 萬田務 新典社

〈謝辞〉

肋膜(炎)・結核について、岩手医科大学第三内科の櫻井滋先生より数々の貴重な御教示を頂きました。ここに記して感謝申
し上げます。